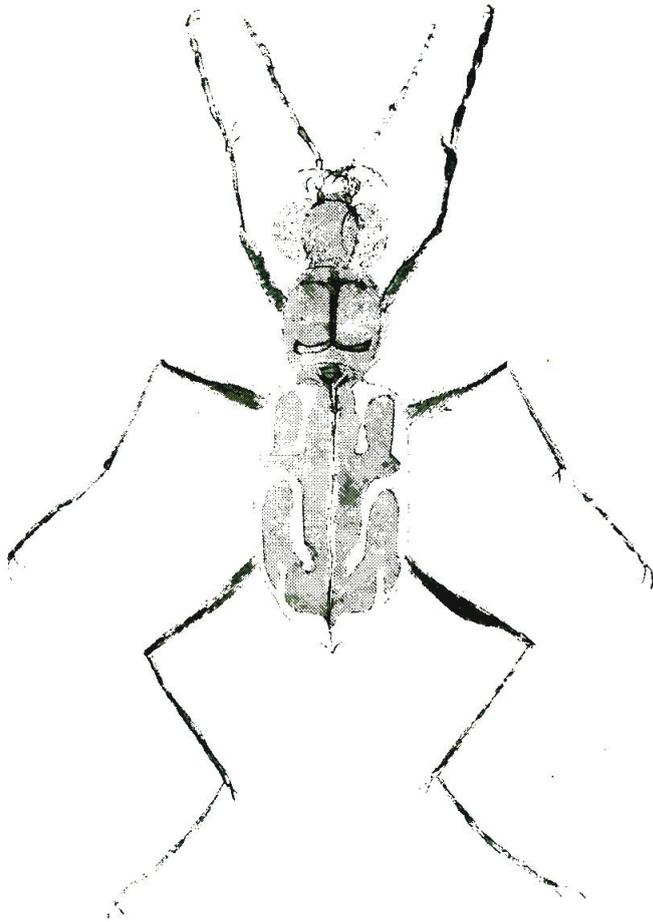


-1963: December-

あころ

第 2 号



鹿 児 島 県 立 鶴 丸 高 等 学 校 生 物 部

【あころ】 第2号 目 次

巻頭言 「あころ」第2号を喜ぶ	顧問	税 所 篤 知	3頁
佐多採集旅行記	26R	八 並 幸 夫	4℃
シダを求めて「佐多の旅」	35R	大 園 正 行	8℃
ツマベニチヨウの擬死について	33R	津之地 浪 穂	10℃
佐多冒険記	28R	宮 脇 憲 歳	11℃
佐多植物採集	39R	窪 田 久 子	13℃
採集旅行	39R	鐘ヶ江 征 子	14℃
思い出の佐多	15R	菊 谷 幸 枝	15℃
佐多岬採集旅行	35R	永 山 光 義	16℃
イシカグマ(佐多採集旅行より)	37R	宮 田 克 子	17℃
採集記 水産グループ	38R	吉 国 清 子	19℃
植物採集記録	植物グループ		22℃
1963年佐多の昆虫採集記録	昆虫グループ		25℃
一滴の水の中に	33R	吉 嶺 楓	32℃
串木野の海産動物採集	37R	宇 和 誠 一	34℃
鹿児島県の多足類		越 山 正 三	36℃
ハエトリグモ	33R	北 山 武 宣	43℃
熱帯植物三種	24R	前 田 宗 浩	45℃
血液判定結果	25R	中 内 孝 雄	46℃
文化祭をかえりみて	35R	大 園 正 行	47℃
シダ植物	16R	西 村 英 一	48℃
「あえこえ」の話	38R	向 静 代	51℃
沖小島採集記	10R	井 田 範 男	52℃
一年をふりかえつて	顧問	柴 原 幸 夫	54℃
部活動報告		宮 地 伸 夫	54℃
鶴丸高校生物部員名簿			55℃
編集後記			56℃
			58℃

○ 表紙説明 ○

表紙原図

津之地 浪 穂

いかりもんはんみよう (はんみよう科)

Cicindela anchoralis punctatissima Schaum.

「ごく平凡な海岸」,これが大泊海岸の印象であつた。1963年生物部佐多採集旅行の2日目のことである。この砂浜をほそほそと流水が海にそそぎこんでいた。この流水の付近に「いかりもんはんみよう」がたくさんいる。白砂にとまつたところは、大変見つけにくい。僕等シロウトの目には普通の「はんみよう」と飛び方もまったく同じだつたが、探つてみると本当にイカリらしいモンが鞘翅にはいつている。時間さえかければたくさん採れそうだつた。

これは鹿児島県で採れる十一種の「はんみよう」の仲間の一つで、分布は石川県と九州南部、台湾、南支那、インド支那で、県内では志布志海岸と佐多町大泊海岸で採集されるそうです。この虫を見るたびに僕は楽しかつた佐多旅行を思い出す。一生涯忘れぬ虫になるであろう。

Ⅷ・13-1963・佐多町大泊・田中洋さんの標本をスケッチした。

巻頭言

あこ 第2号を喜ぶ

顧問 税所 篤知

「あこ」の第2号が出る。なんとかわいらしい芽ばえではないか。これで新しい本葉が一枚ふえた。

昨年発芽したばかりのものをみせていたとき、よく芽が出たものだと言った。こんなものをなんとかして育ててみたいと前々から皆で話したことは度々であつたが芽を出させるまでに至らなかつた。

いつか八並君その他の人々が沖小島採集に行こうとして、いろいろ研究中、かつて先輩が作られた部誌に沖小島採集の特集号ができて、皆で読みながらつくづく感心した。よく地に足のついた、しつかりした研究をしたものだ、そのひたむきな研究態度に驚いた。

部員の一人一人が自らの力で直接自然の中に飛び込み、手ごころなテーマに鶴丸らしい手がたさで取組んでいる。「生物部のありかたはこれだ」と感じた。

ところが「あこ」の2号も殆んど部員各自が今まで自分たちで歩き自分で手を下してまとめた、生き生きとした思い出ある実践の記録である点にはかり知れない価値があり、先輩のものに劣らない。この足どりは歩幅は大きくないかも知れないが、まさに高校生物部の歩むべき大道をしつかりとふみしめながら歩いていると言えよう。

私は毎日の部員の動きを見ていてそれを感じ、大自然の真理に瞳を向ける青春の美しい姿の一面を見る。私はこの小さな「あこ」が次々に葉数を増して、たゆみなく生長をつづけることを心から願っている。先輩の残した豊かな培養土の上に。

弓道場新設のため、止むなく校庭の一隅に移植され、一時は再び芽が出るだろうかと危ぶまれたあこの切株から近ごろ一叢の若枝が元氣よく伸びはじめているのを見て、われ等の愛する部誌「あこ」の前途を祝福しているように思われる。

* * * * *
 * 特 集 *
 * 佐 多 採 集 旅 行 *
 * 1 9 6 3 年 8 月 *
 * * * * *

26R 八 並 幸 夫

私達生物部は去る八月九、十、十一日の三日間、佐多採集旅行を行いました、その準備、日程、反省などを紹介します。

この採集旅行は例年と異つた点があります。

まず第一に参加者の増加。最初、四十二名でしたが、実際に参加した人は三十三名。

第二に男女の同行。これは昨年までは禁止されておりましたが、部員の努力と先生方の御援助によつて実現しました。

第三に今年初めて佐多に行つた事。初めてなので宿舎や採集地の事に詳しくなかつた事が我々を悩ませました。

第四に交通機関に貸切バスを使つた事などが上げられます。

こんなに大きな採集旅行が成功に終つたのは、ただ部員一同の努力と先生、先輩の方々の御援助によつたものだと思つています。

この旅行の準備期間に1ヶ月を要し、部会を三回開き、携行品、注意事項、日程、参加者名簿などのしおりを作り、さらに、採集地やそこで取れる生物のパンフレットを作つて参加者に配りました。

次に今後の資料になるかと思われますので日程を書いておきます。(地図は6ページ)

8月9日

11:00 鶴丸高校出発(税所先生は急用のため参加できず。) 雨強し

加治木経由 (桜島航路が台風9号のため欠航)

15:30 伊坐敷着 宿舎……植木邸

16:00 宿舎付近の採集 夕食準備

18:00 夕 食

明日の行動の打合せ。 風雨強し

22:00 就 寝

10日

5:30 全員起床

7:00 朝 食

8:10 出 発 大泊までバス

曇天、一雨降りそり

8:40 採集開始

水産：大泊から山を越えて田尻海岸まで行き、そこで採集、一部の者は佐多岬まで遠征。(干潮は十六時)

帰りに大泊で一時間採集(予定外)。時間がないのが残念だ。

植物・昆虫：大泊から佐多岬にいたる採集

18:10 大泊発 伊坐敷までバス

18:40 宿舎着 [水産グループがおくれたため、予定よりおそく着く。]

20:00 夕食

標本整理 (時間が少なく、思うように出来ない)

明日の打合せ

昆虫グループは後間採集

23:00 就寝

11日

水産グループ

植物、昆虫グループ

4:30 起床

5:30 出発 嶋泊海岸へバスで

6:00 起床

5:50 嶋泊着

6:30 朝食

収獲品なし

7:00 朝食 河原で

7:40 伊坐敷発

8:00 嶋泊発 伊坐敷へバスで

バスで嶋泊へ

8:20 伊坐敷着

8:00 採集

茶草園見学

川づたいに上流へ

宿舎の掃除

帰る準備

12:00 嶋泊発

12:00 昼食

12:30 伊坐敷着

昼食

帰る準備

14:00 伊坐敷発

宿舎に別れをつけ出発、未練がのこる。車はハイスピードで。

16:10 桜島着

16:40 鷗丸高校着

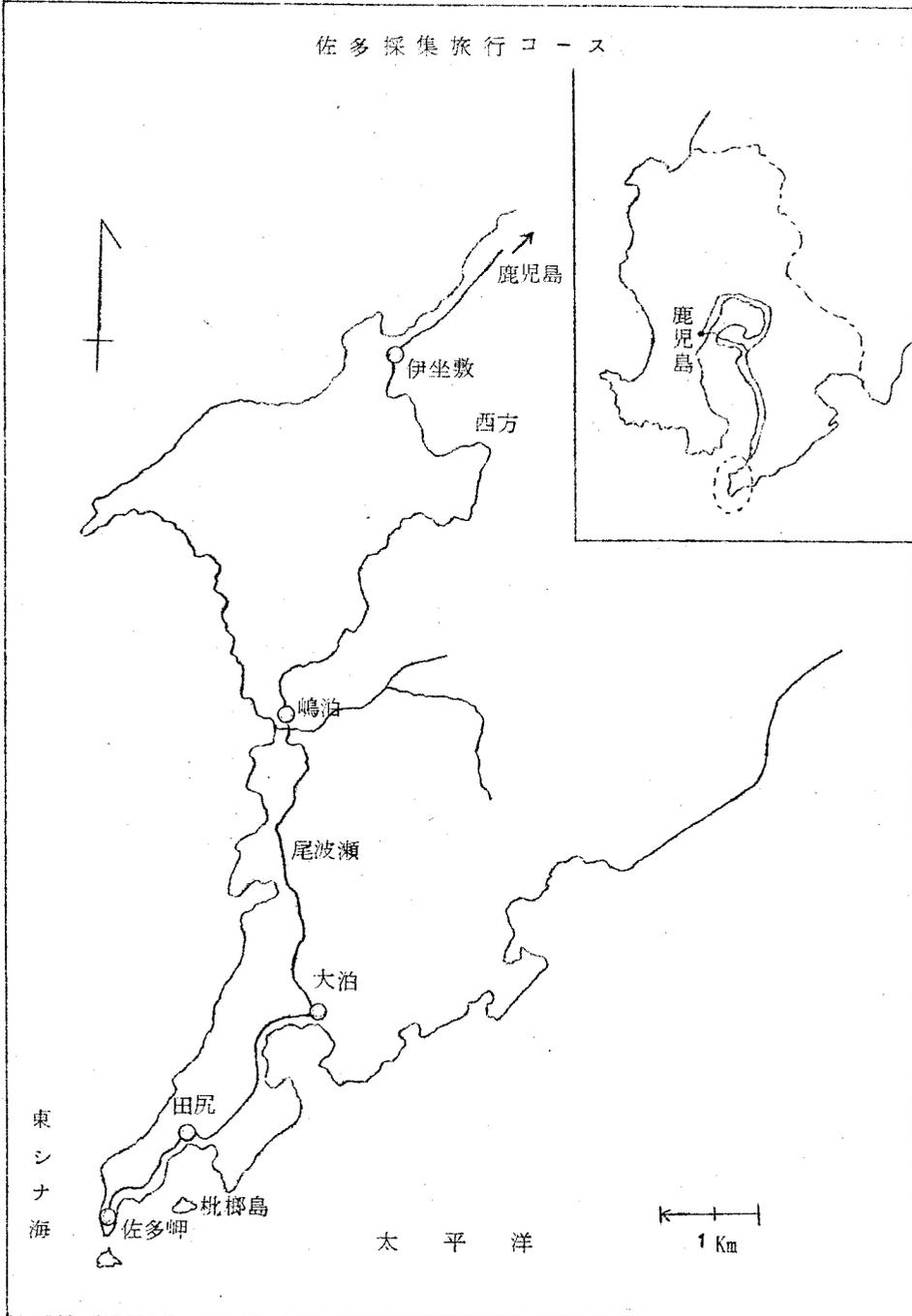
17:00 解散

費用：1人920円(旅費、食費、宿泊費)

貸切バス……

3日間、加治木経由¥17,000(3日間のバス使用は自由)

この値段は努力の結果である。



初めの計画では、七日十三時出発、十日十五時帰着の予定であつたが、台風九号接近のため、四十八時間遅らして九日の十一時雨の中を出発、十一日の十五時帰りました。あとで考えると、三日間で適当だつたと思います。十日以後は晴天にめぐまれ、良い採集が出来た事を本当にありがたく思つています。

八月十五日に反省会を開き、良かった点、今後改めなければならぬ事など、参考になる点がたくさん出ましたので載せておきます。

1. 準備について

宿舎：我々は大泊小、中学校をあてにして佐多に行く事を決めましたが、出発の二十日前にことわられ、ようやく公民館と部員の親類の家を宿舎にする事が出来たが、前もつてしつかりした宿舎を確めて目的地を決めると良い。又しつかりした宿舎があれば、来年はもつと簡単に男女同行が許されると思う。

採集場所：

海浜採集は、大泊という良い場所を知らなかつたため、そこではほんの一時間しか出来なかつた。又十一日の鵜泊には何もなかつた。

前もつて一応調査はしていたが、もつと詳しく調べるべきである。又潮時が十六時で大変悪かつた。

交通機関：

時間や荷物などの点で、貸切バスは大変良かつた。少し高くはなるが、五十名以上だと汽車で行くより安くなる。

又、期間中は自由にバスが使えるので便利。

パンフレット：

採集場所や、そこで取れる生物のパンフレットを良く勉強しなかつた為に、佐多特有の物があつても見のがしがちであつた。

参加者：最初の四十二名が三十三名に減つた事は非常に残念だつた。重大な事情のため行けなかつた人もいたが、進んで参加する人が少なかつた事に原因する。全部員の参加が望ましい。

2. 宿舎での行動

就寝：大良良く守れた。十時に就寝時間を取るのが適当。睡眠は充分取る事。

男女の宿泊について：

計画では男子が公民館、女子が民家であつたが、台風のため、男女とも民家。

その方が、引率者、連絡、台風による万一の事故、又クラブのまとまりの為に結果として良かつた。

標本整理時間：

佐多岬から帰つた日、遅く帰り着いたせい、時間がたりなく、てんてこまいだつた。少なくとも三時間は必要。

その他色々あつたが、強く感じられる事は部員が一致団結してこの旅行を成功のうちに終らせたと云う事でした。そしてこの団結の力こそ、クラブ活動の基本精神であり、かつ大原動力でもあると思います。そしてこの力は今後増々生物部を發展させ、さらに来年の採集旅行はもつと素晴らしいのが出来ると思つてやみません。

佐多採集旅行参加者名簿

1年	2年	吉 嶺 楓
定 信 彦	宮 脇 憲 蔵	窪 田 久 子
柴 原 幸 夫	八 並 幸 夫	肥 後 晶 子
肥 口 一 雄	青 山 昌 二	岩 井 すみゑ
菊 谷 幸 枝	中 内 孝 雄	鐘ヶ江 征 子
小田原 喜代子	3年	宮 田 克 子
浜 田 美由紀	永 山 光 義	吉 國 清 子
中 馬 邦 子	津之地 浪 穂	引率者
伊 寿 一	林 田 重 邦	宮地伸夫先生
西 村 英 一	北 山 武 宣	田中瑞枝さん(理科助手)
玉 利 和 彦	宇 和 誠 一	難波啓子さん(事務員)
	大 蘭 正 行	篠崎美輝さん(鹿児島大学4年)
	前 迫 美智子	田中 章さん(鹿児島大学2年)
		以上 計33名

シダを求めて 佐多の旅

35R 大 園 正 行

8月11日午前八時、伊坐敷から昆虫班の連中とバスで鶴泊にむかつた。約三十分で鶴泊に着いた。ここから鶴泊を流れている川にそつて、奥地にむかうことにした。川といつても幅数メートルの浅いものであつた。そうとう奥地まで水田があつた。水田といつても小さな田のことである。南国だけあつてもう脱穀をおこなつていた。しかし脱穀機はおそまつなもので、足でガタガタ動かすやつを使つていた。道のわきにさかつていた、シラタマカズラの小さな白い実が、たいへんかわいらしかつた。だんだん両側の木々が、頭上におおいかぶさつてきた。道が大きくカーブした所から二メートルぐらいおろした所に、リュウビンタイが数本青々とした葉をつけているのを見つけた。大きなものは葉の長さが二メートルを葉にこえていた。これは関節を持つていて、その関節の所を道に曲げるとすぐにおれた。大きいやつの関節は、にぎりこぼし

ぐらいあつた。あまりにリツパだつたので、これをバツクに記念写真をとつたが、光がはいつてしまつて、おしくもだめになつてしまつた。このあたりから道の両側には、ヤツデの大きいのが小さいのが無教に続いていた。おそらく夷から発芽し、成長したものだろう。

やがて道は切れ、広場となつていた。この広場にはいる少し手前の本陰げの所で、ヘゴを五六本見つけた。おそらく自生したものであろうと思われる。だれもこのよきを所まで、わざわざ植ゑにこないだろう。ヘゴとしてはまだ小さなものであつたので、一本もつて帰ろうと思つて堀つてみたが、根ほりなどではとうてい堀り取れるものではなかつた。この広場から先は、炭を運ぶために作られた、丸太のレールが敷いてあるだけであつた。そこで昆虫班はここに残つて採集することになつたので、我々植物班だけが、このレールの上をさらに奥地に向うことにした。このレールは地面の上だけを走つてはゐなかつた。所々地面が切れて、この丸太のレールは橋のようにもなつていた。大きなものは、高さが五メートル、長さが二十メートルぐらいはあつたらう。

炭を運ぶために作られたものであるから、もちろん手すりなどはついてゐない。

この橋の所では、丸太の上を一人ずつ、バランスをとりながら渡つて行つた。昆虫班と分かれてしばらくして、左手の崖の上の、たおれて半ぐされになつてゐた木の幹に、ヘツカランが三株ついているのを見つけた。たいへんめずらしいものである。



ヘツカラン

レールが川のすぐわきを走つてゐる所で、前進をやめることにした。しかし、レールはさらにずりつと奥の方まで続いていた。土手のジメジメした所に、まるで緑のカーテンをおろしたように、ヘラシダがピツシリはえてゐた。その中でマツザカシダを発見した。緑の中の白い部分がたいへん印象深かつた。

ここからさらに奥地に行つた所に、たいへんめずらしいヘツカシダがあるという話であつたが、美しきかよわき女性がいつしよの上、採集して来るだけの時間もなかつたので、このシダの採集はあきらめた。

このあたりまでくると、たいへん静かであつた。聞えてくるのは、岩の上をすべるように流れるものすごくきれいな水の音だけであつた。

一口のんでみたら、つめたくてたいへんうまかつたので、腹いっぱいのものでしまつた。

しばらくこの別天地で休んだ後、今進んできた道を下つていつた。

ツマベニチヨウの擬死について

33R 津之地 浪 徳

今年度(1963年)生物部佐多採集旅行で初めて、ツマベニチヨウなるものを見た。だがその三日間に一頭も採集できなかつた僕。悲しい限りである。同旅行で他の人が二頭は採集できているのだから。

ツマベニは旅行第二日目(8月10日)伊坐敷と佐多岬間では、わずか二頭目撃しただけ。風が強すぎたせいだろうか?

三日目(8月11日)。この日は「嵐の後の静けさ」。我等を悩ました台風九号も完全に通過し、嘘のように晴れ上っている。

「今日こそ絶好日!」

嶋泊を流れる川の上流付近を重点的に採集した。川添いの山道を上りつめた所に材木切り出し場があつた。土は水分を多分に含み、こじんまりとした採集場所となつている。

ここで昆虫班は休憩をとつた。しかし、目だけは輝かせて。ツマベニが飛んでいるのは今日だけで十数回目撃しているが、一匹も自分の三角紙には、は入つてくれぬ。この切り出し場で一頭の♂が吸水しているのを目撃した。これも収穫できず。別な個体♂が一頭又、吸水にやつて来た。

もうこちらはグロツキーになつていた。僕は、血気に逸る数人が、あの美しい、優雅な蝶にかけより、ネットを振りまわすのを傍観していた。「バサツ」永山君のネットのスプリングにツマベニの羽が当つてしまつたらしい。「ストン。」個体は悶え一つせず地面に落ちた。「叩き落した。即死!」と直感する。皆、永山君の所にかけよつた。しかし僕の想像に反して、三角紙に入れられたツマベニは、力強く、ガサガサと足をばたつかせていた。スプリングは片羽に当つたらしく無惨にちぎれている。しかし同じようなことが4~50分後に再び起つた。

又、別個体がフワフワと吸水?に降りて来た。切り出し場には、田中さんと、未練を捨て切れないう宮脇君と僕が残つていたのだ。エネルギーな宮脇君が、すかさずネットを振る。「振る」と言うよりも、むしろ、「かき回す」と言つた方が適当なようだ。もちろん自分もその時、そんな様子であつたらう。彼が大振りをやつた。「ストン」。又落ちた。今度は前回のように「バサツ」。と言う音が全々しなかつた。

本当に空振りであつたらしい。個体は鱗粉一つ落ちていない完全な♂だつた。ツマベニは三角紙に入れられた。それから「しまつた」。と言う様子で初めて「ガサ、ガサ」。をやりだした。立派に生きている。かすり傷一つなかつたのだから……

このことについて話がまとまらぬまま佐多旅行もすんだ。もはや十二月になつてしまつたが、その時の間諜を考え直してみた。

一回目に落ちたのは羽が破れたためであるとも考えられる。しかし少なくとも羽が少し破れたぐらいでまっすぐ「ストーン」と落ちたのは、不思議である。

二回目は、僕の見え目では絶対ネットは個体にふれていなかった。このことは田中さんも目撃されていたから、ほぼまちがいないであろう。

するともしかしたらツマベニは擬死と言う習性があるのではなからうか？僕は以前佐多におけるツマベニの擬死についてふれた記事を何かで読んだことを覚えている。たしかに、その記事の内容は「佐多で木にとまっつているツマベニに下から石を投げたら、当らなかつたが落ちてきた。擬死か？」というのである。

現在一生懸命その記事の載っていた本を捜しているが、どうしても見つけれない。

どなたか、どの本に書いてあつたか知っている方がいらつしやつたら、教えて下さい。

佐 多 岬 冒 険 記

28R 宮 脇 憲 蔵

八月九日。風雨依然として強し。しかし朝の一番列車で学校へ行く。でもその時は今日旅行があるとは夢にも思っていない。ところが現にこうしてあることになつたのだ。あわてて準備を済まして午前10時30分車中の人となる。かくして我が生物部の採集旅行が始まつた。加治木、国分を経由して一路目的地佐多へ。佐多に近づくにつれて意外に風雨の強いことにおどろいた。

「これではあまり望めないな」と思った。伊坐敷へ着き宿舎へ落ち着き、早速付近の採集に出かけた。我々は神社の付近を採集した。そこは木が繁つていて、風のほとんど吹かない良い場所だつた。花も何か知らないけどたくさん咲いていた。チヨウはあきらめているからもつばら甲虫類の採集である。網で花をたたいたり、花の上を振り回していると数種のハチが入つていた。名称は不明である。しばらくそこで採集して、かけめぐつているとクロコノマチヨウに出会つた。しかし途中で見失つてしまつた。それからアオスツアゲハを見つけたので採ろうとしたら、そのすぐ朝に変なチヨウを見た。私の目にはアオタテハモドキみたいに映つた。とつさに網をそちらに向けて振つたがだめだつた。後で人に話して見たけど、信じてくれるような人はいなかつた。おしいことをしたような気がしてならない。そこでの採集は結局失敗であつた。次の日は佐多岬まで行くのだと、はりきつて夕飯を食つたので腹の調子悪し。……

前の日早く寝たせいか三時前に眠がさめてしまつた。あと二時間あると思つて眠ろうとしたがだめだつた。仕方なく歯を磨く。ところが突然雨が降り出した。どしやぶりである。この分では今日の岬行きはどなることやら。しばらくすると雨は止んだ。止んだと思つたらまた降り始めた。そうこうしているうちに空も次第に明るくなつて来た。午前四時四十分全員が起床す。午前六時三十分無事食事にありつく。午前六時五十分私と津之地さんは先発隊としてバスを迎えに町へ行

く。途中の花壇でトウワタを見かけたけれどもカバマダラの幼虫らしきものは全然見かけなかつた。午前七時三十分岬へ出発。バスの窓からチヨウの観察をする。アオスジアゲハ、クロアゲハ、サツマシジミ、ムラサキシジミ等が主に見かけられ、ツマベニなど特有のチヨウは一頭も見かけなかつた。大泊でバスをおりて、岬まで徒歩で行くのである。大泊の海岸付近では皆タテハモドキの発見に目を輝かせながら進む。けれどもだめであつた。浜辺では中内君や津之地さん等はイカリモンハンミヨウの採集をやっている。私はタテハモドキ発見にやつ気である。山道にさしかかると皆、花をたいて甲虫類を求めているが前日の台風の影響かほとんど採れない。途中シヤコウを見かけて網を振つたが入らなかつた。また現われたので振ると今度は入つた。少々うれしかつた。と言うのは私は今まで一度も自分の手で採集して見たことがなかつたからである。

ほとんど採集品のないまま田尻に着いた。田尻の海岸で休息していると津之地さんがタテハモドキを一頭採集して来た。ちよつとくやしなかつたから付近を採集したがだめであつた。それからまた岬まで歩いて行つたが何も採集できなかつた。ただ美しい島を見ながらブツソウゲの咲いている南国的な道路を歩いただけであつた。予定を狂わし、夢をこわした台風9号がにくらしい。しかし途中でツマベニチヨウを見かけた事は少々元気づけてくれた。一時間半佐多岬の景観をながめて帰途に着く。結局最も期待していた本日、何も採集品らしきものはなかつた。もうあすの午前中しかないのだ。我が願いを聞いてか次の日はカラリと晴れて風もほとんどない。我々は鵜泊へ行きそこから川を遡上つて山の方へ進んで行つた。川のそばで数本のギヨボクを見かけたことは我々の期待を大きくしてくれた。すぐにツマベニを見かけた。走つて行つて振り回したけど少々高すぎた。道が急に回つている所で永山さんが発見して、採ろうとしたが失敗。そのチヨウはクサギの花に吸蜜に来ていたのだつた。途中ムラサキシジミやムラサキツバメを採りながら1キロ位行つた所でちよつとした広い野原に出た。そこでしばらく休息していると、そこに吸水に来るらしいツマベニが二、三頭上空を舞つている。ツマベニチヨウは何頭となく種子島に居た時採つていて魅力もないはずなのに、でも私はほしかつた。一頭が下の方へおりて来た。皆いつせいに追いかける。遂に永山さんが採集に成功。残念なり。私はちよつと高い所にイシガキを見つけたので田中さんの棒を借りて採ろうとしたが、それでもとどかなかつた。しばらく休息し、吸水に来ていたモンキアゲハを採集して帰ろうとして途中まで帰りかけて、棒を一本おすれて来た事に気づきすぐにとりに帰つた。そして行きかけると目の前にツマベニが飛んで来た。とつさに網を振つたが入らない。そこで大きな声で「ツマベニ」「ツマベニ」と叫びながら追いかけて行き網を大きくふるとすつと目の前に落ちた。すぐに拾つて見ると、どこもキズはなく完全品であつた。私は、はじめて満足感を感じた。これでこそこの旅行に参加した意義があつたと思つた。植物の人達と合流してバスを待つ所までおりて行つた。そこには目の前に細い川があつたのでエビとりに行つた。エビをとつているとゴマダラが飛んで来た。私は網は持つていなかつたので麦わら帽子を振ると、それにあつておちて来た。ゴマダラは鵜泊以南での採集記録が無いと言う話を聞いたとき、またうれしかつた。

バスで伊坐敷まで帰り、バスを降りてから家へ行くまでの田にタテハモドキを多数発見。帰る準

備のあい間をうまく利用してタテハモドキを追いかけた。私が約十頭津之地さんが十数頭採集した。最後の半日でこれだけたくさんが良い物が採れたのだ………

ああ台風9号がにくらい。もし、3日間とも今日のような日和であつたらどんなにすばらしい事だつたらうか。しかし

気げん良く伊坐敷を後にした。来年は本年よりもつともつと良い品がとれますようにと祈りながら。

佐 多 植 物 採 集

39R 窪田久子

八月九日、台風の余波でまだ天気は悪かつたが、私達は元気よく学校を出発した。夕方近く、目的地の伊坐敷に着いた。こちらは雨も風も、鹿児島より強く、海がゴーゴーとうなつていてちよつとこわかつた。いろいろな道具を運んで、ちよつと落ち着いた後、私達植物班は森崎さんと一諸に伊坐敷の神社まで採集に出かけた。私にとっては初めての採集なので、胴乱を肩にかけて今まで聞いた事のないむずかしい名前を覚えながら採集することに最高の喜びと誇りを感じた。オニヤブソテツ、イシカゲマ、ツルソバ、ハマビワ、イノモトソウ、コフジウツギ、ボンテンカ、イワヒトデ、ハスノハカズラ、オリヅルシダ……などが、その日の収穫である。10時、消灯。海のすさまじい音でなかなか、寝つかれず、友達と遅くまで、ひそひそと話しをしていた。

第二日目、8時前に伊坐敷をバスで出発し、大泊まで行き、そこから各班に別れて行動した。私達は、そこから、小さな山を採集しながら越えた。登りだけで胴乱がいつ頃にいつになつた。ケカモノハシ、ナチシダ、ムラサキシキブ、サカキカズラ、ヘラシダ、サツマイナモリ、クサギ、ホウロクイチゴ……など。

ホラシノブとタチシノブの見分けがなかなか出来なかつた。山を越えた後、海岸に出た。天気が良く、海が南国らしく、キラキラ輝いて印象的であつた。そこからは、採集はしないで、そのすばらしい風景をながめながら歩いた。やがて、トンネルを通り、佐多神社に、一休みして、熱帯植物園に着いた。巨大なヘゴがあり、その大きさに驚いた。佐多岬に着いた時、そのながめの雄大さに、感嘆し、目を見張つた。大きな、どす黒い岩に、外洋の波が打ち寄せて、白く、砕けていくところは、爽にすばらしく、ぞつとするような思いだつた。そこで昼食をとり、帰りは大泊まで、往きと同じ道を歩いた。宿に帰り着いたのは、予定より二時間位遅れて、七時頃であつた。11時頃、床についた。海は、まだ、ゴーゴーとうなつていた。

11日、水産班が、早朝4時頃から準備をしていた。潮の関係で、こんなに早く採集するのである。私達は、7時に最後の採集に出かけた。朝の空気が、特別、すがすがしくて、最高に気持が良かった。滑らかな道を、ゆつくりと進みながら、シロヤマゼンマイ、マルバウツギ、イワヒメ

ワラビ、イワガネソウ、イワガネゼンマイ、ヘツカリンドウ、アリドウシ、などを採集した。アリドウシは、全部が鋭いトゲだつたので、どのように標本にするんだらうかと、ちよつと、とまどつた。途中、昆虫班と一諸に、ひと休みして、さらに、山奥に入つて行つた。小さな谷川があり、私達は、その丸太の橋を渡り、ちよつと、スリルを味つた。その川の淵で、珍らしいというマツザカシダを見つけた。小型で葉の真中が白くなつている、大変美しいシダである。12時前に、宿に帰り、すぐ、水産の人達が用意していた昼食をとつた。今度の採集旅行の最後の食事だつたが、あわてて食べたので、何を食べたか全々記憶がない。この後は、急いで、荷物を整理したり、部屋をかたづけたりして、本当に忙しかつた。最後に、お世話になつたおばさんに、お礼をして、全員で記念撮影をして帰途についた。

今、ふりかえつてみると、学校側の反対や、台風という、いくつかのピンチを全員の手で乗り越えて、ついに、実現したこの二泊三日の採集旅行は、高校最後の夏休みにとつて、実に有意義なもので、生涯の楽しい思い出の一つとなるでしょう。

採 集 旅 行

39R 鐘ヶ江 征子

用意は万事OK、いざ出発となつてから台風到来、このために採集旅行が二日間も延びてしまつた。この二日間のラジオの台風情報と取り組んでいた私達は、だいぶ状況もよくなつて来たので風の中を出かける事になつた。しかしまだ完全に収まつているわけではなかつた。途中の海岸沿いでは、高波がバスの窓をたたいた。心中なんだか心細かつたが、伊坐敷に着いた時はいくらかおさまつていた。でも折からの雨には少々困つた。宿泊所の裏には海が迫つていて、波音が凄まじかつた。翌朝早く起きた。ここにいる間、取れる物は全部というくらい採集したい気持だつた。ともかく朝食を済ませて、先生の話と行動とを聞き、バスに乗り込んだ。皆で大泊まで行きそれから各班に分かれての行動である。私達水産の班は、海が中心であるから、岩の間や砂上のものなどを見つけながらゆつくりと歩いていつた。途中で一山越えなければならなかつたが、わりと平気で越せたのはうれしかつた。道なき道とおぼしき所を登るのは、楽な事ではないのだが。しばらくすると視界が開けて、多少観光めいた場所に出てきた。そこに続く海岸で採集を始めた。他の人達は岬まで行くと言つたが、私達三人はそこに残る事にして、皆を待つ事にした。まず腹ごしらえをして、折よく干潮になつたので採集にかかつた。しかしそこではせいぜいエビや、小魚やインダタミやタコノマクラ位しか採れなかつた。帰りに又山を越えて、さつき来た海岸でまだ見ていない岩場の先まで行つてみると、いるいる、めずらしいのがたくさん、紅、青緑、アズキ色等のヒトデや、クモヒトデ、縞模様ヒトデ、それに直径10cm位もある色彩豊かなウニ、体型のおもしろいカニ、色々な魚等々、私には初めて見るものが多かつたように思えた。い

つか夏休みに大牟田に行つた時、海岸で上傘が直径30cmもありそうなクラゲを見て、驚ろいた事があつたが、それ以上にこのヒトデの色の多種多様な事には驚ろかされた。そして、自然界における生物の不思議さを思うと同時に、これでやつと採集に来た価値があつたように感じた。帰りのバスの中ではカゴビンが揺れて、今にも倒れそうで困つた。宿についたら採集物の整理である。外はだいぶ暗かつたので、懐中電燈の下で行なつた。ちよつと不便だが、いろんな物が、一つ一つカゴビンの中から取り出されると、それらがスポットライトの中でおどつているみたいにきれいだつた。それが済むと皆いつしよに夕食である。協同で多量に作るのは、簡単に見えるが難かしいものだと思つた。消燈11時、特に水産の班は明朝4時に起床なので早目に床に入つた。波も修まつたようであつた。皆も眠りについたらしい。時計が4時を告げたのを覚えた。何だか寝ていないような気さえた。顔を洗いに外へ出ると、周囲はやみに包まれて、月光だけが冴えて美しく、潮の香が鼻をつく。サツと顔を洗つてバスに向かつた。他班の人達はまだ寝ている。朝の空気を吸い込んでバスは走る。車中ではまだコツクリする者もいたようだ。次の採集地鶴泊に着いた。朝早いせいか空気が冷気を帯びてさわやかな心持ちだ。近くからラジオ体操の音が聞こえてきた。しかしこの海岸は今まで行つた海の中で、最も荒れていて、採集どころではなかつた。漸愈して引き返した。他の班もおつつけバスで来る頃である。その間に水産班の人達は道路脇の材木の上で朝食をとつた。畑に行くらしい人達が、めずらしそうに見て、通つて行つた。丁度側にあつた橋の下の小川は、とても冷たく、気持が良かつた。ここには大きなエビがいたので、男子に頼んで取つてもらつたが、これが宿の食卓に出ようとは思わなかつた。そして再び伊坐敷へ帰り、記念撮影の後、帰途に着いた。歌声と共に桜島の方を通つて歸つた。バスの揺れ心地が揺りかごに似ていたのだろうか、後からは皆眠り出していた。午後4時、学校に着く、あれやこれやで気をまませたが、楽しく過ごした二泊三日の採集旅行も、これで終つたのである。

思　い　出　の　佐　多

15R 菊谷幸枝

引率の先生方と我々生物部員三十人余りの一行が佐多岬へ出発したのは、台風九号の通過した直後であつた。その為、到着した日は採集らしき採集はできなかつた。でも一応落ち着いてから宿舍付近を、採集がてら歩いて見たので、宿舍近くの様子は大体わかつた。前はすぐ海である。海は台風の余波でおおかみのようにぼえさわいである。

翌朝午前五時起床、早めに朝食を済ますと、いよいよ採集に出かける。バスで大泊まで行き、ここからは山越えだ。マムシは出ぬかと気をつかいながら、汗をふきふき登る。ナツプサツクのひもが肩にくいこむ。途中、上級生の方や先生方に習つて何種類かの植物を採つた。でも名称を良

くのみこんだのは、サツマサンキライとか、ハマゴウなどほんのわずかなものであつた。其夜、採集物を整理する時、どうも今日は収穫物が少なすぎたな、と思いながら横を見ると、三年生の人達も、せつせと整理中だ、ホルマリンをかける為のナイロンの袋にいつばい。私は明日こそは頑張らなくては、と思いつつ床につく。昨晚のようにやはり波の音は非常に大きい。その音が不気味に響き静かな夜をにぎわしている。昨夜は、風雨のためだろうと思つていたが、どうもそうではないらしい。

三日目の朝、人の気配で目がさめた。外はまだ暗い。水産班の人達が出かけるころだろう。私達植物班、それに昆虫班も、七時過ぎには出かけた。その日は龐大主でこの旅行に同行された、リーダー格の篠崎さんの後にくつついて行つた。できるだけ多くの植物を知るために。ちよつと山の手へさしかかつた崖に、かわいらしい、シラタマカズラが見つかった。さつそく洞乱の中へしまいこむ。山の中へ入るに従つて、洞乱も重くなつてくる。シダ類の見分け方、つまり葉の先の方や根の先を見るときも覚えた。シダ類とは、同じ様に見えても、何と種類の多いこと、とは私のシダに対する感想である。かなり奥の方でヘゴも見られた。大変大きなものだ。昆虫班の人はさかんにツマベニチヨウを追つている。道が細くなつてきた。炭をはこびだす為の物か、小さな丸太も敷かれている。その内、その丸太だけの所もでてきた。すなわち、小さな谷川などの上に、橋の様な形で丸太が並べられているのだ。そんな所を渡るのは、あまり気持の良いものではない。目的地のすぐ手前の、最後の難関らしきものの所で、とうとう私はまいつて、近くの石に腰を下ろしてしまつた。高地先生が、洞乱など持つて下さり、渡る要領などを教えて下さつたので、やつと、目的地に着くことができた。そこで冷めたい水で手を洗つたり、しばらく採集したりした。下りは、その丸太の橋もなんなく渡れた。

今回採集したものの中で一番好きだつたのはやはり、シラタマカズラ、それに、貝類の一種である、カメノテは印象深かつた。

佐多岬採集旅行

35R 永山光義

この旅行は僕の高校生活において最もすばらしい旅行であつたと思う。今度の旅行のように団体での採集旅行は初めてのことであつた。この旅行にも最初は意外なものが我々を待つていた。それは台風という邪魔物であつた。この台風によつて我々の計画は狂わされた。八月七日出発の計画が二日延期されて九日出発となつた。しかしその後は全てうまく運行した。九日の夜、雨が少しばらついただけで、後は天気も回復した。

さて十日早朝より我々の活動が始まつた。宿舎の伊坐敷より大泊まで行つてそこで昆虫・水産・植物の三班に別れた。僕は昆虫班に属していたので捕虫網をたずさえて、さつそつと出かけた。まず大泊から田尻までの山越えが始まつた。そして田尻の海岸を経て岬まで、ずつと歩いて行つ

た。

まだ一度も来たことのない未知の土地を好きな採集をしながら自分の足で歩いて行くのだから実に楽しかった。

燈台に近づくにつれて熱帯樹が茂り、いかにも南の端だという感じがした。展望台に登つて四方をながめてみると、外海の荒波が岩壁を洗つていた。その辺を少しばかり採集してまわつた。ハチとアブの類が三種類ほど採集できた。台風が二日前にきたせいであろうか蝶類はこの辺では見あたらなかつた。ここで昼食をとつて、又もと来た道を引き返し、今度は田尻から大泊への山越えだ。

僕は先輩の田中さんといつしよに行動した。その間に僕は田中さんから、この木は何蝶の食草であるなどと、いろいろなことを教えてもらった。これも楽しい思い出の一つとなるだろう。またサツマゴキブリの成虫と幼虫など採集した。

大泊の海岸までやつて来ると、水産班の連中が先生といつしよに採集していた。名前はよくわからないがナマコなどが採集されていた。この時はもう夕方だったので採集は打ち切れ、この日の日程が終つた。

十一日は水産班は潮の満ち干の関係で朝早く出かけていつた。昆虫班と植物班は後から出かけた。今日の計画は鵜泊での採集だつた。ここには潮合と蝶がいた。佐多が北隈といわれているツマベニチヨウを見つけて、あわててとり逃がしたのは残念であつた。もつと落ち着いて行動すればよかつたのにと悔んだことだつた。でもその後一頭採集できたのでうれしかつた。この鵜泊では蝶は十種類ほど採集できた。ここでの採集は午前中だけで打ち切り、午後は宿舎へ向かつた。帰りのバスの中も実に和やかにすごすことができた。今度の旅行は結果的に見て実に大成功であつた。又、部員の間が親密になつたのも大きな成果の一つであると思う。

この成功のかけには鹿大生の篠崎さんと田中さんの協力があつたことを忘れてはならない。

イシカグマ (佐多採集旅行より)

37R 宮田克子

イシカグマ、それは植物に興味を持つ人ならおそらく「あゝあれのことだな。」と思ひ浮かべるであろう。暖地の林間に生ずるごく普通のシダ植物の一種である。

私が佐多採集旅行に同行した時、始めて聞いた植物の名がこれであつた。それ故なぜかこの言葉が頭から離れないのである。今でも土手道を散歩する時などシダ植物が目につくとすぐイシカグマを思ひ出すのである。

八月九日、伊坐敷に着くと落ちつくまもなく私達植物班は、同行の鹿大文理学部の篠崎さんに連れられ、近辺の採集に出かけた。小雨の降る田舎の景色は、さわやかな緑色におおわれ、のどかな平和そのものである。私は実に気分爽快であつた。前々からこの土地に足を踏んでみたいと

思っていたし、又伊坐敷の人達が大変親切であるという事を聞いていたせいかもしれない。この土地に心から満足し、腹いっぱい新鮮な空気をすう事が出来たのもそのせいであろう。

「それはイシカグマですよ。どこにでもあるシダですがね。」宿舎を一步出た土手を指さして篠崎さんがおつしやつた。植物にはほとんど無知といつてよい私には、もちろん始めて聞く名前だつた。数メートル行くうちに当然の如くこの名前を忘れ再び聞いたのを覚えている。本当になつかしく又楽しい思い出をこのイシカグマは私に与えたように思われる。

私達は深い緑木に包まれこんもりとした古い神社に向かつてあぜ道を歩いていた。薄紫の小さな花をつけたコフジウツギが印象的であつた。これを似た名前のウツギは歌で有名な「うの花」だそうだが、しかしこれは別種である。シダではイワヒトデ、オオイワヒトデ、オニヤブソテツそして一枚の葉から成り、ヘラの形に似たヘラシダ、奇妙な形をしたアマクサシダ、これは典型的な物はあまり見られず、変形の物が多かつた。それから私の頭を悩ませた物にホラシノブとタチシノブがある。今標本を見比べてみると完全に異つているのに気付くのであるが、あの時はどうしてもこの二つを見分ける事が出来ず、翌日岬の方へ採集に行つた時も篠崎さんに何回も聞いた。そんなわけでこの二つのシダも私にとつて印象深い植物である。神社には、足をふむ所いっぱいにチジミザサが、又私達が普通みるイモの葉の何倍もある大きなクワズイモがうつそうといひ茂つていた。神社の奥にサツマサンキライを見つけた。佐多に行く前、パンフレットを作つた時本で調べた事があつたので名前だけは記憶していたのであるが実物は始めてだつた。サンキライの一種で佐多地方に多く見られる。それからいつか城山に採集に行つた時ムラサキシキブという美しい名前を持つ植物を教えてもらった事があつたがこの土地でも見られた。初夏に淡紅色の細花を咲かせ、晩秋には、濃紅紫色に熟した果実が群がつて非常に美しいそうである。ムラサキシキブと言うと何かしら美しい遠い昔が思い出される。そう十二単を着かざつた女性のはなやかな平安朝を……私はその植物をながめながらふとそのような事を考えていた。

翌十日、佐多岬へ向かつた。大泊の海岸ではゲンバイヒルガオ、ハマゴウ、ネコノシタ等、山地に入りこむと多くのシダ類が私達の前に現われた。今記憶しているのは、シロヤマゼンマイ、ナチシダ、ゲジゲジシダ、オリヅルシダ、タイワンコモチシダ、コシダ、ヤブソテツ、ノキシノブ、カニクサ、マメヅタ、どれも普通に見られるシダばかりである。が私にとつては始めて見るも同然何もかもが新鮮であつた。

岬に行く途中、緑の自然におおわれた中に一りんの赤い花が私達を印象づけた。ブツソウゲである。佐多という土地、しかも真赤な花、それらが關係してなにかしな情熱的な感じを受けるのであつた。そしてブツソウゲと比較してやさしくかわいらしい薄紫の花をつけたブゲンビリアも美しい花であつた。

岬の景色の素晴しさは、この私では説明する事も出来ない。たゞもういつまでもその場から離れたくない気持であつた。この自然の美しさに私達は疲れも一べんに吹きとんでしまう。シヤングルの中から岩壁に出て海をながめる。この大自然の中に今自分はいるのだなど、何度心に言いさせたかもしれない。それは植物採集であつたからこそいつそう私の感激は深かつたのかもしれ

ない。

岬からの帰りは、私は友と素晴らしい景色をながめつつ、大声で歌いながら今来た道をはき返した。そして大泊りに来た時、「これがパスカルの言葉で有名な葎だよ。」と言われ、ふと立ち止まった。はずかしい事ながら私はこの葎をみるのは、始めてである。今までもちろん知らなかつた。いや注意して観察した事がない故に気付かなかつたと言つた方が良いかもしれない。緑の緑色をした単子葉で思つたよりも強かつた。「これがあの葎か。」心の中でそうつぶやきながら、なんだか心残りのする気持で大泊りを去つた。

翌十一日、嶋泊の山奥にはいろいろそこで珍種、マツザカシグサやヘツカラン、シラタマカズラ等を見つけた。又巨大なリュウビンタイにも、これがシグダ類の一種かと思ひ驚かんばかりであつた。

以上で私のイシカグマに始まる植物採集は終る。どこにでも見られる物や珍種やいろいろあつた。今はもう記憶にないものもある。しかし、私にとっては、どの植物も初めて見初めて名前を聞くものばかりであるから、どれが珍種と言う事は出来ない。全ての植物が珍種に思われ新鮮に感じるのである。それでこのイシカグマに始まる佐多の採集旅行は、生涯の思い出になる事と思う。今後、いつの日か山に登つた時、イシカグマやその他の植物は、何か心の友と出会つた時のような、そんな感情を私の心に呼びおこすことだろう。

採 集 記

—— 水産グループ ——

39R 吉 国 清 子

Member : 宮地先生

北山・林田・宇和・岩井・鐘ヶ江・吉国・八並・柴原・定・肥口・玉利・小田原

Tool: カゴピン、カナヅチ、クマデ、ドライバー、アミ、ビニール袋、軍手

8月9日

雨。台風の影響多分にあり。

11時 鹿嶋市出発 → 4時 伊坐敷着

8月10日

8:00

植物・昆虫・水産グループ伊坐敷出発 → 大泊 → 田尻海岸

水産の女子(鐘ヶ江・肥後・吉国)は宮地先生と、田尻海岸に岬まで行かずに残つた。

干潮は14:00、13時頃から採集開始。海水は冷たく、塩分が多い。

砂浜には種々の貝の破片が多く、特に、巻貝類が多かつた。

14:00 岩井さんと男子八人が帰つて来た。

潮が干き始める。

大小のタイドプールが、出来ていて干いた後の地面には、アヤウミシダ
(コマステル科)やコウウミウチワ等があつた。

◎大プール：深さ1m位

岩の表面には無数のウニが、こびりついていた。

大部分ムラサキウニであつた。

小プール：深さ10cm~20cm位

ヤドカリ、イシダタミ

16:00 田尻海岸 → 大泊海岸

大泊海岸

この海岸は、入江になつており、波は静であつた。

8月11日 晴。

5:30 水産グループのみ伊坐敷発 → 鴨泊海岸

早朝、行つたにもかかわらず、全然採れなかつた。

8:00 鴨泊を出発 → 伊坐敷

昨日、採集したものを整理して、植物、昆虫グループが帰ってくるのを待つ。

以上、私の三日間の日記です。昨年の「あこう」には、植物日記を執筆しましたので、今回は第2期として、水産日記を手がけました。

何しろ、今年、初めて水産のほうにしたせいか、学名のわからぬ珍品も多くて、今だに、未明のものがあります。

それで一応、はつきりしたものだけ載せました。

採集記録

水産グループ

軟体動物門

腹足綱	アメフラシ科	アメフラシ	大泊
	イソアワモチ科	イソアワモチ	田尻
	ニシキウズ科	クビレクロズケ	田尻
	ユキノカサ科	ウノアシ	大泊
	エゾバイ科	イソニタ	田尻
	ツタノハ科	マツバガイ	鴨泊
	スカシガイ科	オトメガサ	田尻
	ニシキウズ科	クマノコガイ	田尻
	スカシガイ科	スソカケガイ	田尻

	タケノコカニモリ科	カヤノミカニモリ	田尻
	タモトガイ科	シママツムシ	田尻
雙殻綱	イガイ科	ヒバリガイモドキ	田尻
ヒザラガイ綱			
	ウニヒザラガイ科	ヒザラガイ?	田尻
腔腸動物門			
花虫綱	バラクチイス科	サンゴイソギンチャク	大泊
	チヂミトサカ科	キバナトサカ	田尻
棘皮動物門			
海胆綱	ナガウニ科	ナガウニ	田尻
	ク	ムラサキウニ	田尻
	ラツパウニ科	シラヒゲウニ	大泊
海星綱	アステリナ科	ヌノメイトマキ	大泊
	アステリアス科	ヤツデヒトデ	大泊
蛇尾綱	オフイオキトン科	オフイオクラシス	大泊
		マルクタンネリ	
海百合綱	コマステル科	ウミシダ	田尻
節足動物門			
甲殻綱	ウチワエビ科	ヒメセミエビ	大泊
	テナガエビ科	イソスジエビ	田尻
	テツボウエビ科	テツボウエビモドキ	田尻
	オウギガニ科	シワセビロガニ	田尻
	カラツパ科	アミメキンセンガニ	田尻
	クモガニ科	イソクズガニ	田尻
	イワガニ科	シヨウジンガニ	田尻
	ヤドカリ科	オンヤドカリ	田尻
	フジツボ科	サラサフジツボ	田尻
	フジツボ科	ミナミクロフジツボ	田尻
		アナシヤコ	田尻
脊椎動物門			
魚綱	ハゼ科	クモハゼ	田尻
	スズメダイ科	シマスズメダイ	田尻
	メジナ科	メジナ	田尻
	スズメダイ科	オヤビツチヤ	田尻

(田尻, 大泊は8月10日, 鶴泊は8月11日) 以上

尚、同定していただいた、国立鹿児島大学水産学部の今井教授および研究生の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献：

原色動物大図鑑Ⅱ	北隆館
原色動物大図鑑Ⅲ	ク
原色動物大図鑑Ⅳ	ク

植物採集記録 ——— 植物グループ ———

大園正行，前迫美智子，吉嶺楓，宮田克子

採集場所 佐多一円

採集日 1963.8月9日 ~ 11日

採集目録

オシダ科

オリズルシダ	佐多岬	10	MMKOY
ヤワラシダ	大泊	10	M
ホシダ	鶴泊	11	Y
ゲジゲジシダ	大泊	10	M
ヘラシダ	田尻	10	MMKOY
オニヤブソテツ	伊坐敷	9	MMKOY

イノモトソウ科

アマクサシダ	大泊	10	MMKO
インカグマ	鶴泊	11	MMKO
ホラシノブ	大泊	10	MMKY
タチシノブ	ク	10	MMKY
イワガネソウ	鶴泊	11	Y
マツザカシダ	ク	11	MMKOY

ウラボシ科

ヒトツバ	鶴泊	11	MOY
イワヒトデ	佐多岬	10	OMK

オオイワヒトデ	佐多岬	1 0	OMMKY
マメヅタ	伊坐敷	9	OMK
ゼンマイ科			
ゼンマイ	嶋泊	1 1	O
シロヤマゼンマイ	〃	1 1	OMKY
ウラジロ科			
コシダ	大泊	1 0	OMK
ウラジロ	〃	1 0	OMK
リュウビンタイ科			
リュウビンタイ	嶋泊	1 1	OMKMY
シシガシラ科			
コモチシダ	大泊	1 0	OMKMY
カニクサ科			
カニクサ	大泊	1 0	Y
クマツヅラ科			
ハマクサギ	大泊	1 0	Y
ハマゴウ	大泊	1 0	YMK
ムラサキシキブ	田尻	1 0	MK
キク科			
チチコグサ	大泊	1 0	Y
ネコノシタ	大泊	1 0	MK
ホソバワタシ	大泊	1 0	Y
ユキノシタ科			
ガクウツギ	嶋泊	1 1	Y
マルバウツギ	嶋泊	1 1	Y
アカネ科			
アリドオシ	嶋泊	1 1	Y
シラタマカズラ	嶋泊	1 1	MKY
キンポウゲ科			
センニンソウ	嶋泊	1 1	Y
キョウチクトウ科			
サカキカズラ	嶋泊	1 1	Y
ケシ科			
タケニグサ	嶋泊	1 1	Y
ミカン科			

サンシヨウ	嶋泊	1 1	Y
マメ科			
ミソナオシ	嶋泊	1 1	Y
ヒルガオ科			
グンバイヒルガオ	大泊	1 0	MK
サトイモ科			
クワズイモ	伊坐敷	9	MK
カヤツリグサ科			
ヤマイ	嶋泊	1 1	Y
ガガイモ科			
ツルモウリンカ	大泊	1 0	Y
トベラ科			
トベラ	嶋泊	1 1	Y
アオイ科			
ボンテンカ	嶋泊	1 1	Y
フジウツギ科			
コフジウツギ	伊坐敷	9	MK
ユリ科			
クサギカズラ	大泊	1 0	Y
ハマサルトリイバラ	大泊	1 0	Y
サツマサンキライ	伊坐敷	9	YMK
ミツバウツギ科			
アカギ(栽)	佐多岬	1 0	Y
ウロギ科			
フカノキ(栽)	佐多岬	1 0	Y

採集者名

Y……吉 嶺 楓

MK……宮 田 克 子

O……大 園 正 行

M……前 迫 美智子

尚、同定していただいた、国立鹿児島大学農学部の初島住彦教授に厚く御礼申し上げます。

アカスジカメムシ	田尻	10/VII	1	津之地
ク	田尻	10/VII	1	中 内
ツチカメムシ	田尻-大泊	10/VII	1	津之地
ヒメチヤバネアオカメムシ	田尻-大泊	10/VII	1	津之地
エビイロカメムシ	嶋泊	11/VII	1	津之地
イネカメムシ	伊坐敷	10/VII	4	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1	中 内
コマダラナガカメムシ	田尻-岬	10/VII	1	中 内
アオクサカメムシ	嶋泊	11/VII	1	中 内
※アカナガカメムシ	田尻-岬	10/VII	1	中 内
トビイロツノゼミ	伊坐敷	9/VII	1	田 中
マエグロオサヨコバイ	嶋泊	11/VII	1	中 内
ツマグロオオヨコバイ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
ヨコバイの一種	伊坐敷	9/VII	1	田 中
オオヒレウンカ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
ギボシマルウンカ	嶋泊	11/VII	1	中 内
ツマグロスケバ	伊坐敷	9/VII	1	田 中
マエグロオサヨコバイ	伊坐敷	9/VII	1	津之地
※ヒゲナガサシガメ	嶋泊	11/VII	1	中 内
○鱗翅類				
ワタノメイガ	伊坐敷	9/VII	1	田 中
ヒメエグリバ	嶋泊	11/VII	1	浜 田
オオトモエ	伊坐敷	9/VII	1	永 山
シロモンノメイガ	嶋泊	11/VII	1	津之地
モンキアゲハ	嶋泊	11/VII	1	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1 ♂	中 馬
ク	嶋泊	11/VII	1 ♂	永 山
ク	嶋泊	11/VII	1 ♀	浜 田
ク	嶋泊	11/VII	1 ♀	津之地
ク	伊坐敷	9/VII	1	栲
クロアゲハ	嶋泊	11/VII	1 ♂	浜 田
ク	嶋泊	11/VII	1 ♀	永 山
シヤコウアゲハ	嶋泊	11/VII	1 ♀	津之地
ク	嶋泊	11/VII	1	中 内
ク	田尻-大泊	10/VII	1 ♂	田 中

アオスジアゲハ	嶋泊	11/VII	1 ♂	宮 脇
ク	嶋泊	11/VII	1	中 内
ナガサキアゲハ	伊坐敷	9/VII	1 ♂	栢
アゲハチヨウ	嶋泊	11/VII	1	中 内
キチヨウ	嶋泊	11/VII	1 ♂	田 中
ク	嶋泊	11/VII	1	津之地
ク	嶋泊	11/VII	1	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1	永 山
ク	嶋泊	11/VII	2	浜 田
ク	嶋泊	11/VII	1	中 馬
ツマベニチヨウ	嶋泊	11/VII	1 ♂	宮 脇
ク	嶋泊	11/VII	1 ♂	永 山
ヒメウラナミツヤノメ	嶋泊	11/VII	1 ♂	田 中
ク	嶋泊	11/VII	1	中 内
キマダラヒカゲ	伊坐敷	11/VII	1	中 内
クロコノマ	伊坐敷	9/VII	1	中 内
ク	伊坐敷	9/VII	1 ♂	田 中
タテハモドキ	田尻	10/VII	1 ♀	津之地
ク	田尻-大泊	10/VII	1 ♂	田 中
ク	伊坐敷	11/VII	4 ♂ 6 ♀	津之地
ク	伊坐敷	11/VII	2 ♀ 2 ♂	宮 脇
ク	伊坐敷	11/VII	1 ♀	中 馬
ク	伊坐敷	11/VII	1 ♂	浜 田
ク	伊坐敷	11/VII	1 ♂	永 山
アカタテハ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
ク	大泊-田尻	10/VII	1	中 内
※ゴマダラチヨウ	嶋泊	11/VII	1	宮 脇
コミスジ	嶋泊	11/VII	1	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1 ♂	田 中
ク	伊坐敷	9/VII	1	栢
ルリタテハ	大泊-田尻	10/VII	1	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1 ♂	田 中
ウラナミシジミ	田尻	10/VII	1 ♀	田 中
ク	田尻	10/VII	1	中 内
ヤマトシジミ	伊坐敷	9/VII	1 ♂	田 中

ヤマトシジミ	鵺泊	11/VII	1♀1♂	田中
〃	鵺泊	11/VII	2♀	津之地
〃	鵺泊	11/VII	1♂	浜田
〃	鵺泊	11/VII	1♂	中内
ルリシジミ	鵺泊	11/VII	1♂	津之地
〃	鵺泊	11/VII	1	中内
ベニシジミ	田尻	10/VII	1	中内
ムラサキシジミ	大泊-田尻	10/VII	1	中内
〃	大泊-田尻	10/VII	1	永山
〃	大泊	10/VII	1	津之地
〃	鵺泊	11/VII	1	津之地
〃	鵺泊	11/VII	1	浜田
〃	鵺泊	11/VII	1	中馬
イチモンジセセリ	岬	10/VII	1	中内
ミヤマチヤバネセセリ	鵺泊	11/VII	1	田中
※アオバセセリ	鵺泊	11/VII	1	浜田
ダイミヨウセセリ	鵺泊	11/VII	1	中馬
〃	鵺泊	11/VII	1	中内
〃	鵺泊	11/VII	1	永山
クロセセリ	大泊	10/VII	1	津之地
〃	大泊-田尻	10/VII	1	永山
〃	鵺泊	11/VII	1	中内
○翰翅目				
ハンミヨウ	伊坐敷	9/VII	2	津之地
〃	鵺泊	11/VII	1	田中
〃	鵺泊	11/VII	2	中馬
イカリモンハンミヨウ	大泊	10/VII	1	田中
〃	大泊	10/VII	4	津之地
ジユウシアトキリゴミムシ	田尻-大泊	10/VII	1	田中
アミダテントウ	鵺泊	11/VII	2	津之地
〃	大泊-田尻	10/VII	2	津之地
アカイロテントウ	田尻	10/VII	1	田中
アカヘリテントウ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
ダンダラテントウ	岬	10/VII	1	田中
ウバタマムシ	大泊	10/VII	1	津之地

フタモンウバタマコメツキ	岬	10/VIII	1	津之地
ヒゲナガコメツキ	大泊-田尻	10/VIII	1	津之地
オオクロナガコメツキ	田尻-岬	10/VIII	1	田中
ヒメスナゴミムシダマシ	伊坐敷	9/VIII	1	田中
ナガニジゴミムシダマシ	嶋泊	11/VIII	1	宮地伸夫
キマワリ	嶋泊	11/VIII	1	中馬
ク	岬	10/VIII	1	津之地
ズグロカミキリモドキ	伊坐敷	10/VIII	1	津之地
ハナノミの一種	伊坐敷	9/VIII	1	田中
ウリハムシ	伊坐敷	9/VIII	1	田中
ク	伊坐敷	9/VIII	1	津之地
ク	大泊-田尻	10/VIII	1	永山
カミナリハムシ	伊坐敷	10/VIII	2	津之地
ク	伊坐敷	10/VIII	1	永山
ニレハムシ	大泊-田尻	10/VIII	1	津之地
キイロタマノミハムシ	大泊-田尻	10/VIII	1	津之地
キバラヒメハムシ	田尻	10/VIII	1	津之地
アオガネヒメサルハムシ	嶋泊	11/VIII	1	永山
ワタカミキリ	岬	10/VIII	1	津之地
ヨツスジトラカミキリ	岬	10/VIII	1	津之地
ヒゲナガヒメヒメカミキリ	伊坐敷	10/VIII	1	津之地
クワカミキリ	大泊	10/VIII	1	津之地
コクゾウ	伊坐敷	9/VIII	1	田中
ノコギリクワガタ	嶋泊	11/VIII	1♂1♀	田中
ヒラタクワガタ	田尻-大泊	10/VIII	1♀	田中
ゴホンダイコクコガネ	嶋泊	11/VIII	4♀	田中
カドマルエンマコガネ	嶋泊	11/VIII	1	田中
コブマルエンマコガネ	嶋泊	11/VIII	1	田中
ヒメコガネ	田尻	10/VIII	1	田中
ク	嶋泊	11/VIII	1	宮地伸夫
ク	伊坐敷	10/VIII	1	中内
ク	伊坐敷	10/VIII	1	中馬
ク	嶋泊	11/VIII	1	中馬
マメコガネ	嶋泊	11/VIII	1	田中
ク	大泊-田尻	10/VIII	1	津之地

アオハナムグリ	田尻	10/VII	1	田 中
ク	嶋泊	11/VII	1	中 馬
コアオハナムグリ	嶋泊	11/VII	1	中 馬
ク	嶋泊	11/VII	2	津之地
※フタスジカンシヨコガネ	伊坐敷	10/VII	1	中 内
シロテンハナムグリ	嶋泊	11/VII	2	中 内
ク	嶋泊	11/VII	1	中 馬
ク	岬	10/VII	1	永 山
クロカナブン	嶋泊	11/VII	2	津之地
カナブン	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
アオドウガネ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
チヤイロドウガネ	岬-田尻	10/VII	1	津之地
マルガタビロウドコガネ	岬	10/VII	1	津之地
セマダラコガネ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
○膜翅目				
クマバチ	伊坐敷	9/VII	1	田 中
ク	嶋泊	11/VII	1	津之地
ク	嶋泊	11/VII	1	永 山
ヒメハナバチの一種	岬	10/VII	1	田 中
キロマルハナバチ	田尻	10/VII	1	永 山
シロスジハナバチ	嶋泊	11/VII	1	永 山
アシナガバチの一種	田尻	10/VII	1	田 中
セグロアシナガバチ	嶋泊	11/VII	2	浜 田
トツクリバチの一種	伊坐敷	9/VII	1	田 中
アシプトコバチの一種	嶋泊	11/VII	1	宮 地
ク	田尻-大泊	10/VII	1	田 中
チビドロバチ	大泊-田尻	10/VII	1	津之地
ク	伊坐敷	9/VII	1	津之地
アメバチの一種	嶋泊	11/VII	1	津之地
○双翅目				
ヤドリバエの一種	岬	10/VII	2	田 中
ニクバエの一種	嶋泊	11/VII	1	田 中
ミスジミバエ	嶋泊	11/VII	1	田 中
ヒゲナガヤチバエ	伊坐敷	10/VII	1	永 山
アシナガバエの一種	伊坐敷	9/VII	5	田 中

アシナガバエの一種	伊坐敷	9/VIII	2	田中
クロバネツリアブ	嶋泊	11/VIII	1	津之地
ク	大泊-田尻	10/VII	2	田中
ツリアブの一種	嶋泊	11/VIII	1	田中
シオヤアブ	岬	10/VIII	1	永山
ク	大泊-田尻	10/VII	1	中馬
ヒメヒラタアブ	伊坐敷	9/VII	1	田中
ウシアブの一種	伊坐敷	9/VII	1	田中
ウシアブの一種	大泊-田尻	10/VII	1	田中
オオクロヤブカ	伊坐敷	9/VIII	2	田中

以上約130種ほどだが、同定は蝶類を除いて全て鹿児島昆虫同好会の竹村芳夫氏にお願いした。生物部員一同厚く感謝いたします。

標本保存が不完全なために、同定困難な物は、リストから除外してある。

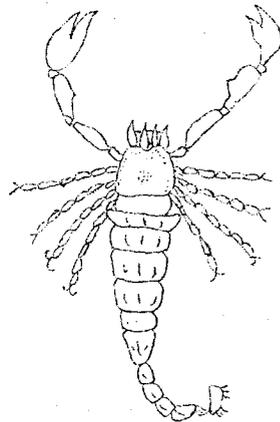
標本所在地は田中、津之地、中内、和の採集したものは各自保管その他の者の標本は鶴丸高校生物室で保管している。

※印の中で、

アカナガカメムシは日本で数頭しか採集されていないそうです。

フタスジカンシヨコガネ、ヒゲナガサシガメも珍品。

ゴマダラチヨウ、アオバセセリは採集記録の南限である。



一滴の水の中に

33R 吉嶺 楓

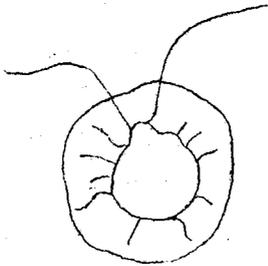
スポイドからこぼれおちる一滴の水の中にあらゆる生物の中で、最も原始的な、単純な微生物が生活している。彼らは肉眼で見えぬことがしばしばである。しかし、そのすばらしい生活力と活動力は、やはり命あるものだという感慨をおこさせる。今まで私は正直にいつて、この微生物たる物に、何ら興味を持たなかつた。その第一の理由として、彼らはあまりに小さすぎるのである。そして第二の理由として、彼らの生体は、常に私に憎悪の念をいだかせてきた。ぬるぬるとした体表、くねくねと動きまわる様子、ほんとうにいやな気持ちになるのである。がそれにもかかわらず、私はこうして、じつくりと彼らを観ることにした。そうする気持ちになつたのは、私の頭の中に、生物に対する広い視野を求めようとする考えが生まれ出たのだと自負してもよいと思つている。

まず顕微鏡、ピンセット、スポイド、カバーガラス、スライドグラス、ガーゼ等を準備した。また実験対象を、プールの水、巻貝を飼育中の水、熱帯魚の水槽の水、熱帯魚の餌を飼つていた水の四種類と決めた。

最初にプールの水から観察をはじめたが、プレパラート作りや、顕微鏡の調子がうまくいかない。少しいらいらしてくる。でもじつと腰をおちつけゆつくり粗動ネジを働かす。ボートかすんで見えたものが、ある瞬間くつきりと浮びでる。じつとそれにピントをあわせる。しかしそれはビクともしない。生き物ではないと判断する。プレパラートを動かす。そして私は小さな丸いものが、さかんに回転するのを見つけた。あまり小さいので倍率を上げる。私にはそれが何である

かわからない。そこで先生にみてもらう。このバレリーナが踊っているような生き物は、ヘマトコックスであることがわかつた。

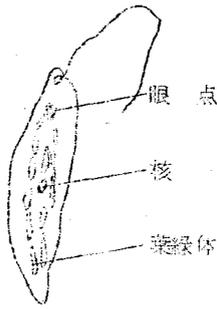
次に目には入つたのは、何かの幼虫であるらしいのだが、はつきり確認できない。その挙動がこつけないのでじつとみていると、また奇妙な物が出てきた。体全体がカンテン状みたいなものでおおわれ、透明であるために食物が通つているのが、よくわかる。わがもの頭に動き



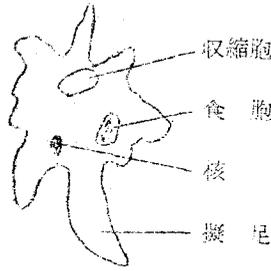
ヘマトコックス

まわつている。それを見ていると、気分が悪くなつてきそうだ。それが、私の手にさわつたような気がして、おもわず、プレパラートにおいていた手を、ひつこめてしまつた。

それから待望のミドリムシとアメーバを見ることができた。ミドリムシは、たしかに鞭毛を動かしながら、その方向へ進んでいたし、アメーバは、いい気になつて、癩足を伸ばして見せてく



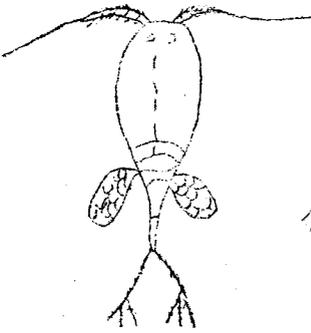
ミドリムシ



アメーバ

れた。ミドリムシといい、アメーバといい、晴一杯活動している様子は本当にかわいいものである。

今度は巻貝を飼育中の水をプレパラートにしてのぞいてみた。見られる生き物全てミジンコである。ケンミジンコ。オオミジンコ。ゾウミジンコ等々。



ケンミジンコ



オオミジンコ

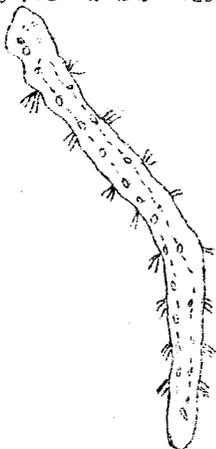


ゾウミジンコ

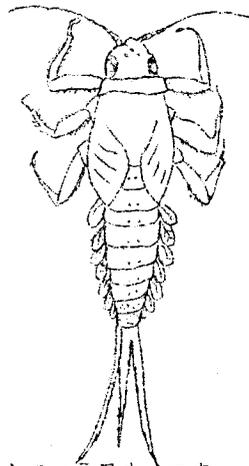


ミジンコ

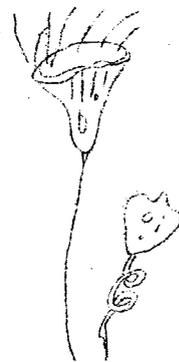
あまりミジンコばかりなので少々うんざりしてしまう。もう一度見直したところベニアブラミミズがいるのがわかった。



ベニアブラミミズ



シロハラコカドコロウ



ツリガネムシ

ぬるぬるとしている。それをじつと見つめる。でもやはり環形動物は好きになれない。それから何も見られないのもう一度プールの水を観察することにした。そこで見つけたのはシロハラコカゲロウの幼虫であつた。これによつて、私は気管エラについての知識を得た。ふわふわとした気持よさそうなふくろのようなものであつた。

シロハラコカゲロウを見られたことに気をよくした私は、どんどんプレパラートを作つて観察し続けた。しかし残念なことに、ツリガネムシを、熱帯魚の水槽の水の中に認めたにすぎなかつた。結局熱帯魚の餌を飼つてた水には、何もみられなかつた。もつともつと見たい物はあるのだが今回の観察は一応これでおわりとする。観察できて名のわかつた生物は、次のようになる。

ミドリムシ	<i>Euglena uiridis</i>	ベン毛虫類
アメーバ	<i>Amoeba proteus</i>	根足虫類
ケンミジンコ	<i>Cyclops vicinus</i>	甲かく類
ミジンコ	<i>Daphnia plex</i>	甲かく類
ゾウミジンコ	<i>Bosmina longirostris</i>	甲かく類
シロハラコカゲロウ	<i>Baetis thermicus</i> Ueno	昆虫類
ツリガネムシ	<i>Vorticella</i>	せん毛虫類
ヘマトコックス	ベニアブラミミズ	オオミジンコ

この観察によつて私の得たものは、ただ単に生物学に対する興味だけではなく、生ある物に対する考え方も拡張したと言つておこつた。ただ一滴の水の中の生物。彼らは実に小さいものである。しかしいかに小さいものであろうと、生ある物には違いない。この観察において、みえていながら私には見えなかつたものがあつたかもしれない。今後私は、ゆるされるかぎり顕微鏡をのぞこうと思う。一滴の水の中にも生命ある物があるから。

串木野の海産動物採集

37R 宇和誠一

十一月三日(文化の日)僕は串木野へ海辺の小動物を生きのまま採集するために出かけた。翌日の文化祭のためである。十二時発のバスで鹿児島を出発、一時過ぎに串木野駅前に到着した。それから徒歩で串木野の長崎鼻といわれている所まで約三十分、午後二時前に目的地に着いた。着くとすぐに採集、干潮は午後二時半頃である。早くしないと満ちてしまう。さつそくズボンの裾と腕まくりをしカゴピンを肩にかけて採集しはじめた。この海岸はちょうど指宿の長崎鼻と同じようで、そこら一面岩石で干潮の今、そこらはずつと潮溜りになつている。絶好の採集場である。一見したところ何もいないようであつた。しかし岩をあけて見るとヒトデがくつついている。岩とほとんど同じ色をしているので、なかなか区別がつかない。岩の間には、ムラサキウニがい

つばいいた。岩をゆすると、カニが大急ぎで飛出してくる、手をもつていくとハサミを持上げる。ウミウシが岩の上をはつている。岩をわつて見ると、おもしろいことに、そこにも扁形動物や環形動物の類がいた。特に苦勞したのは、イソギンチャクを取る時である。大きい岩にくつつているので、どうも勝手が悪い、でも岩をかいて四匹つかまえることが出来た。たぶん石サンゴ類のキクカサンゴだつたと思うが、大きな石に、それぞれ足の踏み場もない位に、ぎつしりとくつついていた。ざんねんなことという、友達がかまえた、何か軟体動物のオビヒラムシに似た動物であつたが、水を換える時に逃がしてしまつた。このようにして、三時間余りのうちに、大体の動物は採集できた。腰も痛くなつた。そこで五時半頃の汽車で帰ることにして長崎鼻に別れを告げた。長崎鼻には東支那海の荒波が打寄せていた。採集は大漁ではなかつたが、時期が時期だけに、まあいい方ではなかつたかと思う。翌日の文化祭では、この動物達が水槽の中であいさようをふりまいてくれた。

なおこの日に採集したものは、Fの通り。

ムラサキウニ Anthocidaris crassispina

棘皮動物門 海胆綱 正形類

ヒメウニ Temotrema sculptum

棘皮動物門 海胆綱 正形綱

コシダカウニ Mespilia globulus

棘皮動物門 海胆綱 卵形目

サンシヨウウニ科

ムラサキクルマナマコ Polycheira rufescens

棘皮動物門 海鼠綱 海肖類

イトマキヒトデ Asterina pectinifera

棘皮動物門 海星綱 有棘目

アステリナ科

クマドリゴカイ Perinereis cultrifera

環形動物門 多毛虫綱 多毛虫類

サメハダホシムシ Phascolosoma Scolops

星虫動物門 星虫綱 星虫類

イイジマヒラムシ Stylochus ijimai

扁形動物門 渦虫綱 多岐腸類

ツノヒラムシ Planocera reticulata

扁形動物門 多岐腸類

タテジマイソギンチャク Diadumene luciae

肛腸動物門 磯巾着目 磯巾着類

ベニツケガニ *Thalamita prymna*

節足動物門 短尾族 方口亜族

ヒライソガニ *Goetice depressa*

節足動物門 短尾族 方口亜族

シヨウジンガニ *Plagusia dentipes*

節足動物門 短尾族 方口亜族

シャコ *Squilla oratoria*

節足動物門 口脚目

ニシキヒザラガイ *Onithochiton hirasei*

軟体動物門 ヒザラガイ目

ムラサキイガイ *Mytilus edulis*

軟体動物門 イガイ科

ハテイラ *Tegula pfeifferi*

軟体動物門 腹足綱 原始腹足目

ニシキウズ科

鹿児島県の多足類 (ムカデ、ヤスデ)

越山 正三

ここに掲げる鹿児島県産多足類(倍足綱, 唇脚綱, 主として唇脚綱ムカデ類)のリストは 1955 年以降, 鶴丸, 高校生物部員及全校生徒の手によつて採集せられたるものにて, 東京都立小岩高校の篠原圭三郎先生の同定によつたものである。

今日まで鹿児島県に於ける記録は極く断片的に高桑良興博士及三好保徳博士によつてなされたばかりでした。従つて過去 10 年間に於ける本校の標本の採集記録は本県下, 屋久島に及び幾多の貴重な記録であり, 本校に於て採集同定されたものです。

*印は新たに分布が確認されたもの。

Diplopoda

倍足綱

Polydesmoidea

オビヤスデ目

Strongylosomidae ヤケヤスデ科

1. *Oxidus gracilis* (KOCH) ヤケヤスデ
産地：鹿児島市 X. 22 - '55, X. 23 - '55, X. 24 - '55, IV. - '56,
V. 3 - '56, XI. 2 - '56 種子島(高桑-'54)トカラ諸島宗島(三好-'55)中之島(三好-'55)奄美大島(三好-'59)
分布：世界的, 日本では北海道以南の本州四国, 九州に極めて多く産する。
2. *Oxidus nordeuskioldi* (ATTEMs) キリシマヤケヤスデ
産地：霧島 VII. 31 - '57
分布：青森県, 埼玉県, 和歌山県, 台湾
3. *Oxidus* sp. larva
産地：霧島 IV. 27 - '56

Leptodesmidae ババヤスデ科

- *4. *Rhysolus semicircularis* (TAKAKUWA) アマビコヤスデ
産地：鹿児島市 X. 24 - '55, 霧島 VIII - '58, 谷山市慈眼寺 K. - '58
分布：本州中部以西, 四国, 九州, 朝鮮

Palydesmidae オビヤスデ科

- *5. *Epanerchodus bifidus* (TAKAKUWA)
産地：鹿児島市城山 X. 24 - '55, X. 29 - '55, 寺山 IV. 21 - '56, 加治屋
町 XI. 2 - '55
分布：阿蘇山, 朝鮮, 大分県南海部郡
6. *Epanerchodus* sp. (No. 1)
産地：鹿児島市 VII - '56 XII - '56
7. *Epanerchodus* sp. (No. 2)
産地：霧島 VI. 28 - '57 VII. 31 - '57
8. *Epanerchodus* sp. (No. 3)
産地：谷山市慈眼寺 K. - '58

Cryptodesmidae クビヤスデ科

- *9. *Niponia nodulosa* (VERHOEFF) マクラギヤスデ
産地：佐多岬 IV. 1 - '57
分布：埼玉県, 東京, 横浜, 横須賀, 江の島, 真鶴, 八丈島, 長崎, 台湾

Nematophora ツムギヤスデ目

Diplomaragnidae ミコシヤスデ科

10. Szntelopodeuma sp.

産地：霧島 VII. 9 - '56

Juliformia ヒメヤスデ目

Juliciae ヒメヤスデ科

11. Fusiulus cornutus (TAKAKUWA) カドフシヤスデ

産地：鹿児島市 K. - '56 II. 4 - '57

Chilopoda 唇脚綱

Geophilomorpha シムカデ目

Schendylidae マツシムカデ科

1. Thalthybius tenuicolis (TAKAKUWA) サキプトシムカデ

産地：鹿児島市 IV - '56, 霧島 VII. - '56

志布志(高桑 - '39)

分布：東京以南の本州，四国，九州，沖縄

Mecistocephalidae ナガズシムカデ科

2. Mecistocephalus mororatus (UERHOEFF) フチナガズシムカデ

産地：鹿児島市城山 II. 10 - '57, 本校内M. 2 - '55 東桜島X. - '55

沖小島 VIII. 5 - '56 谷山市慈眼寺 K. - '58

分布：広島，今治，雲仙，西表，台湾

3. Mecistocephalus diversisternus (SILVESTRI)

ゴシチナガズシムカデ

産地：鹿児島市 X. 22 - '55, 寺山 IV. 21 - '56

慈眼寺 K. - '58, 志布志(高桑 - '39)

分布：埼玉県以南の本州，九州

4. Prolamnonyx holstii (POCOCK) ツメデムカデ

産地：鹿児島市内 X. 22 - '55, M. 2 - '55 II. 21 - '57

慈眼寺, K. - '58

分布：北海道，本州，四国，九州，朝鮮，満州，台湾

Geophilidae ツチムカデ科

*5. Nesogeophilus kozuensis (TAKAKUWA) シマシムカデ

産地：鹿児島市 X. - '55

6. Scolioplanes tenuiungulatus (TAKAKUWA)

ホソヅメスコリジムカデ

産地：鹿児島市 X・22-155

*7. Scolioplanes maritimus japonicus (VERHOEFF)

スマトスコリジムカデ

産地：霧島 X・9-156

分布：北海道，本州，四国，九州，沖縄，朝鮮，千島

Scolopendromorpha オウムカデ目

Scolopendridae オウムカデ科

8. Scolopendra subspinipes multilans (C.L.KOCH)

トビズムカデ

産地：長崎鼻 III・10-157 屋久島 VII・-158

種子島(高桑-143)

分布：日本(本州以南)中国，朝鮮，台湾，サイパン

9. Scolopendra subspinipes japonica (C.L.KOCH)

アオズムカデ

産地：鹿児島市 X・-155 桜島 VII・-156 霧島 VII・28-157

分布：本州，四国，九州

10. Otostigmus scaber (PORAT)ノコバセムカデ

産地：鹿児島市 X・22-155 桜島 X・-155

分布：沖縄，台湾，中国，スマトラ，タイ，ビルマ

本種は鹿児島市内雑木林の下層から4匹同時に採集され、桜島ではビワ園で1匹得られている。

11. Otostigmus multispinosus (TAKAKUWA)

産地：長崎鼻 III・10-157，トカラ列島中之島(三好-155)

枕崎(高桑-139)

分布：沖縄，台湾，香港

1939年高桑博士によつて枕崎海岸で一匹採集された。博士はこれを九州に土着するものとは見なさず、「流木などに附着して漂流したものであろう」と記している。三好博士はトカラ列島中から2匹採集されたことを報告している。私共は1957年3月長崎鼻(串木野)に遠足に行き、この海岸近くの岩礁の際にたまつていた藁くずの中から採集しました。これからこの東洋区系のO. scaber 及 O. multispinosus が確実に九州南端に土着棲息していることが判つた。尙近似種の分布一覧表をかかげておく。

種名	地名			
	沖繩	台湾	中国本土	朝鮮
<i>O. multispinosus</i>	+	+		
<i>O. scaber</i>	+	+	+	
<i>O. politus</i>			+	+
<i>O. striatus</i>	+			
<i>O. aculeatus</i>			+	

Cryptopidae メナシムカデ科

*1 2. *Cryptops japonicus* (TAKAKUWA) ニホンメナシムカデ

産地：谷山市慈眼寺 K. - '58

谷山市 IV. 21 - '56

分布：高野山，山中湖畔，長崎県小浜，小倉，熊本，大東島，西表島，朝鮮，満州

1 3. *Otocryptops rubiginosus* (C.L. KOCH) セスヂアカムカデ

産地：霧島 VIII. 9 - '56, 鹿児島市 X. 20 - '55 谷山市 K. - '58

分布：函館，本州，四国，台湾，中国，フィリピン，アメリカ

1 4. *Otocryptops sexspinosus* (SAY) アカムカデ

産地：鹿児島市 X. 22 - '55 寺山 IV. 21 - '56 霧島 ('60三好)

分布：本州，四国，九州，沖繩，朝鮮，台湾

*1 5. *Otocryptops sexspinosus quadristriatus* (VERHOEFF)

ヨスヂアカムカデ

産地：霧島 VIII. 9 - '54

分布：本州

Lithobiomoopha イシムカデ目

Lithobiidae イシムカデ科

1 6. *Bothropolys arperatus* (C.L. KOCH) イツスムカデ

産地：鹿児島市 X. 29 - '55, X. 30 - '55 IV. 21 - '56

IV. - '57 城山 X. 22 - '55 加治屋町 VIII. 2 - '55

寺山 IV. 21 - '56 本校内 IV. 24 - '56

東桜島 VI. 28 - '57 谷山市 K. - '58 霧島 VII. 28 - '57

佐多岬 IX. 1 - '57 長崎鼻 III. 10 - '57

屋久島 VIII. - '58 種子島(高桑 - '43)

トカラ中之島(三好 - '59)

分布：日本，朝鮮，カラフト，満州，中国，台湾などの極東地域

1 7. *Bothropolys* sp.

産地：屋久島 VIII. - ' 58

18. *Lithobius* sp. (No. 1)

産地：鹿児島市 IV. - ' 56 V. 3 - ' 56

長崎鼻 III. 10 - ' 57

19. *Lithobius* sp. (No. 2)

産地：霧島 IV. 22 - ' 56 VII. - ' 56 VII. 27 - ' 57

20. *Lithobius* sp. (No. 3)

産地：鹿児島市甲突川畔

21. *Lithobius niger* (TAKAKUWA) クロイシムカデ

産地：霧島林田温泉, 硫黄温泉 (高桑 - ' 41)

22. *Monotarsobius* sp. (No. 1)

産地：鹿児島市 IV. 21 - ' 56, 霧島 IV. 22 - ' 56 VII. 28 - ' 57

23. *Monotarsobius* sp. (No. 2)

産地：鹿児島市 X. 30 - ' 56 IV. - ' 56 X. 30 - ' 55

東桜島 X. - ' 55 長崎鼻 III. 10 - ' 57 佐多岬 IV. 1 - ' 57

Henicopidae トゲイシムカデ科

24. *Esastigmatobius longitarsis* ナガゲシムカデ

産地：佐多岬, IV. 1 - ' 57 霧島 VII. 28 - ' 57 VIII. - ' 58

慈眼寺 X. - ' 58 屋久島 VIII. 6 - ' 58

伊作 (高桑 - ' 41)

分布：本州, 四国, 九州, 沖縄, 台湾

25. *Esastigmatobius longicornis* (TAKAKUWA) ホウゲシムカデ

産地：霧島, 伊集院町 (高桑 - ' 41)

分布：九州, 朝鮮, 本州, 四国

26. *Lamyctes guamus* Koshiyamai (SHINOHARA) ニホントゲイシムカデ

産地：鹿児島市 X. 29 - ' 55 VI. - ' 56 加治屋町 XI. 2 - ' 55

甲突川畔 VI. - ' 56 本校内 IV. 24 - ' 56 東桜島 X. - ' 55

桜島 X. 26 - ' 56

分布：鹿児島, 埼玉県

この学名は鶴丸高校の採集記録の記念となつた学名である。*Lamyctes* 属は全世界に広く分布しているが、不思議に日本では採集されず戦前カラフトと琉球大東島よりわずかに2種が産することが既知であつた。ところが藤原圭三郎氏は1953年に鳥島に分布していることを報告しその時日本本土からも得られるものと示唆したもので、其の後次々とこれが確認された。藤原氏は鳥島産は鹿児島産, 埼玉県産と同種で *L. guamus* の亜種であることを報告した。甲突川畔か

らは前後数回にわたつて雌雄20匹以上採集された。

形態的特徴は次のようである。

- ①体長 8~5mm
褐色、歩肢15対（最終歩肢は比較的長い）
- ②触角小節数は28個
基部の2小節は特に大きい。
- ③頭の両側に紫色の大きな個眼が左右各1個有在する。

これで「鹿児島県産の多足類」のレポートは終るが、この研究が現在部員さらに将来の部員に引きつがれていかん事を期待してやまない。

筆 者 紹 介

越 山 正 三 先生

先生は旧一日時代からの古顔で、長年生物の教鞭をとつていらつしやいましたが、今年の四月から御病気で静養のため休職していらつしやいます。「先生「あこう」の原稿を募集していますが、何かお書きになりませんか。」私は先生にお会いした時謹い気持で言いました。すると、一週間後にこの貴重な記事が学校に届いたのです。この欄をかりまして、深く御礼申し上げます。

先生は暇さえあれば、家を外にし、写真を写したり、絵を書いたりしていらつしやいます。個展も毎年開かれます。植物採集を始められたのは学生時代で、その時はただ先生について行くだけだつたそうです。当年四十九才の若者。

住所 鹿児島市草牟田町4053

ハ エ ト リ グ モ

33R 北山武宣

見るともなしに、ボンヤリと窓ごしに月をながめていた。私に微笑みかけていたかどうかは知らないが、とにかく良い気持であつた。ところが先から目障りな奴がガラスをはいまわつている。一匹のハエトリグモだ。そこに光を求めてやつて来ている招かざる客の小ささを虫にまじつてハエが数匹たむろしている。もちろんクモは飢えといった状態で物色中だ。面目そうだというところで私の観察みたいなものが始まる。

時は9時27分、クモは5センチ位の射程距離にはいろいろとする。ちよつと危ないな、取り逃がすぞと思つた。果してクモには気の毒だが、やはり無理だ。二回目3.5センチ位、さすがにハエトリと名のつくクモだ。射程距離にはいりさえすれば、うまいものだ。簡単に胸部に喰いついた。ハエは20回位はばたき、といつてもその数は確かではない、その後羽撃くことをしない。クモはただちに喰い始める。〈9時45分〉触角でしつかりとハエの体をつかみ口に持つて行つている様子。生唾手元にルーペがなくはつきりとその状態をみることができぬのが残念。そして触角が手の役目をするとはね、ちよつと意外という感じだけど、そう思うのが変なのかも知れないが、私は特にそれがどうだこうだとは知らないから問題ではない。時々ハエを動かし口の位置を変えているみたいである。クモの目は蛍光灯の光を赤くそして金色に冷たく反射している。一瞬ゾツとした。もう目は見たくない。見れば怖い。クモの目ほど怖いものはないと思つた。〈10時〉ハエの体とクモが直角になつた。果してこのクモこのハエを一匹喰つてどの位生きるものだろうかと考えたら、尾崎一雄の「虫のいろいろ」が思い出された。彼のはいつエサを喰つたか分からぬ奴をつかまえてその実験をやろうとして、ピンにとじこめて観察していたけど、結論が出ないままクモが逃げている。私もやつてみようか。そして米粒大のハエを喰うのに何時間位かかるかをもちよつと、その結果を教えてやろうかとも考えたけど、余計なお世話かいだと言われそいな気がしたので、結局止める事にした。

30分経つても形はそのままだ。窓ガラスなので、前後、背腹左右から観察できるが、前からと背からのそれが一番良い。喰つているのかいないのかはつきり分からぬが、以前としてしつかりハエをつかんでいる。〈10時10分〉ハエ、クモ一列に並んだ。前よりはつきりで見ることが出来る。体が少ししぼんできた。汗だけを吸つているらしい。足一本なくなつていゝ。どこにも落ちてはいない。すると、30分で足一本喰つたことになる。いやいやこれも確かではあるまい。腹の方に口を移す。今度は確かに喰んでいる。ハエが左右に少しづつゆれるから………。

〈10時17分〉頭、腹部に口の跡が見えるだけで別に変化なし——。

〈10時20分〉又胸部に口をもどした。今まで他の虫に無頓着だつたのが、少しそれに気を取られるらしく、先程みたいに一心に喰つてはいないが、口に喰わえてはいる。〈25分〉3分の2位にしぼんだ。又、腹を喰い始めているが、喰うと言うよりも吸うと言つた感じの方が強い。

<10時30分>口を顔に持つて行つたり、胸に持つて行つたりで、3分と定めていない。現在は、腹の後端に近い所である。ハエの胸部と腹部がほぼ同じ位になつた。頭はやつとこさ付いている。<10時45分>ほとんど変化なし。<10時54分>ハエを落してしまつた。足を口のところに持つて行つてしきりに何かしている。

<10時56分>には又別なのを捕えた。前よりも大きな奴だ。射程距離5センチ位、みごと一発。やはり胸部だ。前と違ふところは背に喰いついているということ。<11時>ハエが元気がなくかすかて手を動かしているが、クモは喰いついたまま。先に落したハエは体液が半分位しかなかつた。普通のそれは、頭をつぶすと赤い血みみたいなものがべつとりと出て来るが、今のは片方を針の先でつぶしてもほとんど出て来なかつた。もう一方からは少し出て来た。<11時5分>ハエが死に胸部の腹面にクモは喰いついている。やはりハエであつても、背の方はクチクラ層に包みられているから喰いついていくのだろうか。巢を張つているクモなども昆虫のクチクラ上皮だけは喰わずに残しているものを時々見かける事がある。<11時10分>今度は吸うと言ふより喰うと言つたよりの様子である。しかしちよつとのシヨツクで落してしまつた。<11時25分>射程距離2.5センチ位に近づいた。が、ハエはそれを知つてか知らずか、熱心に羽の手入れ中。どうもお見合があるといつた様子である。クモが飛びかかる瞬間、ねこがタマをとる時、身構えるあの格好とそつくりである。やはり喰みつくところは胸部である。もう一匹捕らせよう。ガラスの向い側にいるのを捕えようと身構えている。<11時45分>やつとハエを見つけ出して、捕らせる事ができた。やはり胸部だ。胸部の背の方を喰わえたままで、ハエが死ぬのを持つて、それから喰かうという魂胆かも知らん。胸部だけをねらうのはどうもこいつだけではなさそうだがハエトリグモと名のつくクモはその習性を持つているのかも知らん。誰か前にこんな研究をやつている人がいるか？と、ちよつと面白くなつた。

ハエを捕える。そして元気がなくなつた頃おもむろに前足で体をまわし腹部に喰らいつく。これがどうやら連中の常道らしい。もう一度やつてみよう。やはり胸部だ。背の方に飛びついたけど相手がいけない。なにしろ倍もありそうなハエだから。腹面に喰いつくといふところまで持つて行かないうちにハエが逃げてしまつた。もういいかげん腹もいっぱいになつた。そして今のでもうとりどりだと言ひんであろうか、それより、もうとらなくなつてしまつた。と言ふところで私のふざけも終つてしまいました。0時15分31秒。

熱帯植物三種

24R 前田宗浩

I. クキトベラ *Scaevola frutescens* Rrause

クサトベラ科

クサトベラ属

分布：屋久島，種子島，琉球，太平洋諸島，台湾，マダガスカル島，オーストラリア

所在地：西之表市現和，田之脇海岸

私が小学六年の時行つたきりでその後訪れていないのだが，記憶はたしかだから一筆。

その時，種子島に二本しかない木という事で見に行つた。丸い石ころの海岸と藻木が叢生している境い目の所にクサトベラはあつた。樹高1.5m。葉は，長さはトベラの3倍以上の10cm，幅は5cmほど，色は明るい黄緑，表面は光沢がある。トベラほどの臭気はない。

II. メヒルギ *Kandelia Candel* Druce

ヒルギ科

メヒルギ属

分布：薩摩，屋久島，種ヶ島，印度，マレー半島，琉球，支那南部，台湾

1. 熊野のメヒルギ

メヒルギの北限は薩摩という事で，種ヶ島にはあつても珍しくない。

熊野のメヒルギは熊野湾に，それも海岸の近くに生育している。熊野湾は奥行き約2Km，幅約1Kmあり，その外海と接する所は50m位しかなく，川が流れこんでおり，干潮の時には湾全体が砂浜と化す。その中にはえびなどもいる。

メヒルギは根元が大きいので潮地でも生育できるので湾に叢生していても別に不思議ではない。熱帯ではこれが海岸のマングローブを形成しているそうだ。しかし，この熊野湾は浅いため，干拓工事が行われつつあつて湾内の潮ぬきもある程度行われている。それであるから，もしメヒルギをずつと残して，潮が出来るようになるまで観察したらどうであろうか。

2. 熊野浦のメヒルギ

熊野浦は熊野湾のつづきで，メヒルギが生育している所はちよど川が流れ込んでいて，しかもそのすこし上流には種子島家の塩田の跡がある。道のわきにはサンカクイが自生していて，昨夏はこれを農夫がかまで刈つていた。このメヒルギは熊野湾のそれよりも数が多いし，いつも根元が水に浸つているので熱帯をおもわせるところがある。道から見ると，サンカクイとメヒルギとの区別がはつきりついているのがわかる。この木はある一定の深さの間に於てのみ生育するようである。

III. モンパノキ *Messerschmidia argentea* Johnston

ムラサキ科

スナビキソウ属

分布：種子島，琉球，台湾，東南アジア，オーストラリア，アフリカの主として海岸に生ず。

所在地：西之表市西之表，住吉海岸

幼少よりモンパノキの話を聞いて心をよせていたのであるが実際に見たのは高校一年の春である。

父もモンパノキの事を詳しく知っているし，祖父母も詳しいから相当昔からあつた事は確かである。今年の夏行つてみたら，木は前見た時と違つた場所に植えかえられてあつて，見つけ出すのに苦勞した。父の話では「昔，モンパノキは渚から二十メートルも離れていない所に生えていて，岸から見てもそれとはつきりわかるほどであつた。しかし，数年前の台風のために倒れてかれたらしい。」と言ひ事であつた。

モンパノキは潮に対して強く，その枝が海をただよつて陸にうちあげられてからでもまだ芽を出す能力がある，と言ひ事である。それだからふだんでも潮のあたるような所に流れついて生長したのである。春行くとこの木が島に流れついた地点でなく，そこから約150m東の川の水門の所に移植してあつた。ガジユマルの木が対岸にあり，となりは人家でその家の庭からは木が見えていた。そしてモンパノキの根元はコンクリートブロックで囲つてあつた。

夏行つてみるとこの場所には木がなくてワラが積んであつたのでかかれてしまつたのかと思つたが，土地の人の話で移植されたと言ひ事がわかつた。今度移植された所は前の場所から西北約500m，燈台のすぐ下であつた。春見た時には花がさいていたのに夏見ると枝は切られて主な枝しか残つておらず，葉は一枚もなく，幹にはコモをまきつけてあつた。よく調べる事は出来なかつたが，どうも植えかえの為，かかれてしまつたのではないかと思う。

血液型判定結果

25R 中 内 孝 雄

1960～1963年 血液型判定結果

血液型	1960年		1961年		1962年		1963年		過去4年間の%	全国%
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
A	14	37	60	37	132	41	148	40	40	38
B	6	17	36	22	59	18	83	22	21	22
AB	3	9	22	13	36	11	30	8	10	9
O	14	37	45	28	95	30	115	30	29	31
計	37		163		322		374			

この表は'60～'63の文化祭に於て，本校生徒を対象に行われた結果をまとめたものです。

文化祭をかえりみて

35R 大園 正行

今年の文化祭は昨年と趣向を変え、初めての試みとして、会場を展示会場と実験会場の二つに分けた。

まず実験会場ではコイ、ニワトリ、うさぎ、牛の眼球の解剖、血液型判定、プラナリアの走光性の実験などを行なった。又受付では、葉脈標本を渡し、女生徒にうけていた。コイの解剖は三年の女子が二匹行なつたが、コイをねむらすまでキヤーキヤーさわいでいた。ニワトリの解剖は北山君と自分が行なつた。首を切つて血液を出しておいたため、水がにがらず説明しやすかつた。一回練習をしたのだが、名前のあやふやな所が出てきたりして、どうもうまくいかなかつた。うさぎの解剖は八並君に宮地先生、一年の女子を加えて行なつた。重要な所の説明は宮地先生が行なわれ、一年生が多かつた。牛の眼球の解剖は、眼球をたくさん用意しておいたので部員の指導で希望者全員に行なわせた。が女子の中にはきみわるがつてさわるうともしない人がいた。ガラス体があまりに美しかつたのでびつくりしていた。中にはレンズをみやげに持つて帰つた人もいた。血液判定は一番人気があり判定時間にはいつも人だかりがしていた。「昨年と同じだつた」などと言つているふざけた人達もいた。血清は七百人分用意していたのだが実際には四百人たらずしか出来なかつた。プラナリアは目を持つていて、光をあてると反対側へにげた。この会場には、熱帯魚しか展示してなかつたため実験がない時はガランとしていて気ぬけがした。

展示会場には、植物班、昆虫班、水産班の三班がそれぞれ展示した。まず植物班は佐多で採集して来たシダ類、鹿児島市内で採集したシダ類、ラン類を中心に展示した。アカウキクサやデンジソウの前では「これもシダか？」というような顔をして見ている人が大変多かつた。昆虫班はチヨウや甲虫の標本とチヨウの幼虫蛹、リンパン転写、生態写真などを中心とした。また顕微鏡を持ち出して、チヨウのリンパンの観察もした。チヨウの標本はたいへん美しいためか、女性の中にはしばらく立ち止まつていた人もいた。水産班は、佐多で採集してきた海産動物の標本や、串木野の長崎県で採集してきた生きた海産動物を中心に展示した。佐多の採集品の中には珍しい物が数多くあつたが、全般的に小さなものが多かつたので重量感にかけていた。又テレビ式の幻燈機をもつて来て、佐多のカラーズライドや先輩の中中さんが写して来られた大島などのカラーズライドも行なつた。会場の片すみには、電蕃を置きムードコーナーと称して一日中レコードをかけ、展示会場の気分をさらに盛り上げた。これはなかなか好評でリクエストまでとびだした。総合して考えてみると、今年には内容も大変充実していて、満点とまでいかなかなくても、かなり良い結果が出たと思われる。最後に先輩の御協力に心からお礼申し上げます。

シダ植物

16R 西村 英一

シダはどこに行つても見かける植物ですが似たものが非常に多いためになかなか採集が難しいものです。それで今まで採集した標本の中でもシダが非常に少ないでした。そこでこの秋はシダを中心に採集したわけです。気を付けて採集すると案外集まるもので、約40種類ぐらい集まりました。それで採集したシダについて観察した事を述べておきます。

A) イノモトソウ科

1. ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn var. *latiusculum*
(Desv.) Und

1963.10.27 鹿児島市城山 2~3回羽状 胞子は葉の縁につく。高さは50~60cm程度。茎はおれやすく葉はしおれやすい。

2. イノモトソウ *Pteris multifida* Poir.

1963.8月 鹿児島市城山 登山道路の入口の石垣にあつた。乾燥した所にもあるようである。栄養葉は小さなきざみがあり幅は広く厚さは薄い。葉の長さは20~30cm。

3. アマクサシダ *Pteris dispar* Kunze

1963.10.7 鹿児島市城山 木が茂つていて日のあたらない所に多い。非常にしおれやすい。2~3回羽状、胞子は葉の縁に付く。

4. ホラシノブ *Sphenomeris chusana* (L.) Copel.

1963.10.28 鹿児島市城山 葉の大きさは30~60cm

5. タチシノブ *Onychium japonicum* (Thunb.) Kunze

1963.11.3 原良 3~4回羽状 ほらしのぶに似ているが葉がホラシノブに比べるとずっと細い。

6. マツザカシダ

1963.8.11 佐多町鶴泊。葉の中央は白く美しい。

B) ウラボシ科

7. オオイワヒトデ *Colysis pothifolia* (Don) Pr.

1963.8.10 佐多

8. カツモイノデ *Ctenitis subglandulosa* (Hance) Ching

1963.8.11 佐多町鶴泊。2回羽状 城山にもあるが城山のものは葉のきざみが深い。霧島に行く途中にも見つけたが城山や佐多のものより小さかつた。

9. ノキシノブ *Lepisorus thunbergianus* (Kaulf.) Ching

1960.8月 単葉，樹上に多い。他のコケ類と一緒にはえている。あまり日の当たらない所に多い。

10. ホウライシダ *Adiantum capillus-veneris* L.

1960.8月 鹿児島市城山。鹿児島市内いたる所で見ることができる。水分が多く日の当たらない所にある。城山では登出口の付近にある。

11. ハチジヨウカグマ *var. formosana* Ros.

1963.8月 鹿児島市城山。コモチシダとの違いは良くわからないが「名付けの会」の時、付けてもらったらハチジヨウカグマということだったのでこれで良いと思う。城山の東斜面にある。2m近くあるものも多い。

12. ヘラシダ *Diplazium subsinuatum* (Wall.) Tagawa

1960.8月 鹿児島市城山。単葉，日の当たらない湿った所に群がってはえている。城山ではMBCテレビ塔から新照院に下りる道にある。原良で40cm近くあるものは葉は短かく幅も広くなつていて別種のようである。

13. ヌカボシクリハラシ *Microsorium buergerianum* (Miq.) Ching

1960.8月 鹿児島市城山。単葉，頂上近くの木の上にはえていた。葉の長さ20cm。

14. オニヤブソテツ *Cyrtomium falcatum* (L.f.) Pr.

1960.8月 鹿児島市城山。単羽状葉，石垣で良く見かけるが色が薄く非常に小さい。水分が少ないためだと思ふ。

15. ミツデウラボシ *Crypsinus hastatus* (Thunb.) Copel.

1960.8月 鹿児島市城山。単葉 城山の登山道路の中腹あたりにある。このごろはかなり少なくなつてゐる。原良でも見かけた。

16. ゲツゲツシダ *Phegopteris decursive-pinnata* (van Hall) Fee

1960.8月 鹿児島市城山。単羽状葉，大きなものは40cm近くある。登山道路にそつてはえている。

17. ミゾシダ *Leptogramma mollissima* (Fisch.) Ching

1960.8月 鹿児島市城山。

18. ヒメイタチシダ *Dryopteris sacrosancta* Koidz.

1960.8月 鹿児島市城山。

19. イシカグマ *Microlepia strigosa* (Thunb.) Pr.

1960.8月 鹿児島市城山。

20. フモトシダ *Microlepia marginata* (Panzer) C. Chr.

1960.8月 鹿児島市城山。

C) フラジロ科

21. ウラジロ *Gleichenia japonica* Spr.

1963.10月28日 鹿児島市城山。高さ50~60cm。城山の西側や原良に群が
つている。

22.コシダ *Dicranopteris dichotoma* (Thunb.) Bernh.

1963.11.3 鹿児島市原良。城山の自動車道や鹿大医学部の付近にもある。

霧島に行く途中にもかなり見かけた。胞子が非常にわかりにくい。

D) オシダ科

23.コバノカナワラビ *Polystichopsis pseudo-aristata* (Tag.)

Tagawa

1963.8.11 佐多町鶴泊。4回羽状。

24.ナンカイイタチシダ *Dryopteris varia* (L.) O.Ktze.

1963.8.11 佐多町鶴泊。2~3回羽状。

25.オリヅルシダ *Polystichum lepidocaulon* (Hook.) J.Sm.

1963.10.27 鹿児島市城山。登山道路の入口から少し行つた所にある。無性
芽を出して繁殖する。

E) フサシダ科

26.カニクサ *Lygodium japonicum* (Thunb.) Sw.

1963.10.27 2~3回羽状 つる状のしだで小さな木の茎にまきつく。上の
方に胞子葉がある。

F) リユウビンタイ科

27.リユウビンタイ *Angiopteris lygodiifolia* Ros.

1963.8.11 佐多町鶴泊。非常に大きなシダである。茎の直径は4cmぐらいは
あつたと思う。城山にも同じものがある。以前は「天然記念物リユウビンタイの自
生地」と書いてあつたが今はない。佐多のものとは比べものにならないほど小さく
高さ30~40cmほどしかない。数も非常に少くこのままでは絶滅するのではなか
らうか。

G) ゼンマイ科

28.ゼンマイ *Osmunda japonica* Thunb.

1963.10.28 鹿児島市城山。城山の西側にある。

胞子葉をまだ見たことがない。原良には1.5m近くあるものもあつた。かなり早く
かれるようである。

29.シヤマゼンマイ *Plenasium banksiaefolium* (Pr.) Pr.

1963.8.11 佐多町鶴泊。高さは1m近くある。城山にもある。かたまつて生
えている。

H) イワヒバ科

30.カタヒバ *Selaginella involvens* (Sw.) Spring.

1960・8月 鹿児島市城山。現在自動車駐車場になつている所のすぐ近くにかなり大きな木がある。その木の上にたくさん群がってはえている。前はもう一つ大きな木があつたが今は切られている。

I) シシガシラ科

31. シシガシラ *Struthiopteris hiponica* (Kunze) Nakai

1963・11・10 霧島 大浪池への登山口付近で見つけた。韓国岳でも見つけたが非常に小さかつた。

以上、今まで採集した主なシダ植物を述べましたがかなりいいかげんな部分もあると思います。特に「科」の所などは本によつてちがうものがあつたりして、非常に迷いました。又非常に似たものが多く図鑑を見ても、わからないものも多かったです。今からはもつと多くのシダ植物を採集してみるつもりです。

「あえこえ」の話

38R 向 静 代

あえこえの話、これは私の故里に伝わる奇妙な話です。私の故里、それは東シナ海に横たわる小さな島です。一年中あたたかく霧も降らない私の村では、だるま菊などめずらしい花も少なくありません。天までとどくような段々畑、猫の類ほどの畑をたがやしては漁のをい今、一家の生計をたてているこの寒村。若者は皆出かせぎに行き年寄りと子供だけのさびしいこの村に、やがて冬がやつて来ると、それはもう本当にさびしいものです。木枯しの吹くさびしい夜にいろりを囲みながら、おじいちゃんによく話してもらつたあえこえの話、それはずつと昔から語り伝えられているといわれている。

節分が近くなる頃、それも寒い夜の十一時から朝三時ぐらいまでの間に、夜空を何物かが「あえこえ、あえこえ」と鳴きながら南の山の方から北の海の方に向つて鳴いていくのです。私は小さい頃「あえこえ」の声を聞きたいばかりに夜おそくまで起きていたのですが、なかなか聞くことが出来ないものでした。その声は悲しく寒い夜空に冴えわたっていくのです。すると村の老人や老母は目と目をしながら次の様な話しをしてくれたものです。

「三月の節句、この日は一番の潮時で村人は皆海に貝取りに行く行事が行われるが、貝取りをしていた母子がいました。母子だけの家庭はまずしく、母親は近所の漁師の船が着くと、船を上げたり魚を干したりしてやつと生計をたてていました。その母親がある大きな岩の所どつとも大きなあわびを見つけたのです。母親はこれを売れば子供の着物でも買えると思つたのでしようか。潮が満ちてくるのも知らないで一心に取りつづめました。一方子供の方は小さな岩の上で潮

が満ちて来て母親の方へ渡ることが出来ず途方にくれていました。子供は母親の方へ渡ろうとして岩の上から足をすべらせ海に落ちてしまい波にのまれて死んでしまいました。母親は消えた子供を探し求めて、岩の上を泣きさげびながら走りまわりましたが、海に沈んだ子供が再びもどつて来るわけはありません。後悔と悲しみにうちひしがれた母親はとうとう鳥になつてしまつたのです。そして三月の節句が近くなると、子供を探して「あえこえあえこえ私の子供はどこにいる。」とさげびながら渡るのだそうです。」

昔から伝わるこのあえこえという鳥、生物を習つた今考えて見ますと、夜行性の渡り鳥ではないかと思うのです。しかし渡り鳥としては群をなして飛ぶ様子もないし、その鳴き声は一片の鳥から発せられる様なのです。この鳥の習性としておもしろいことは、節分の頃の寒い夜、暖かい日は渡らないのです。海の荒れた日や月夜には渡らないという統計も出ています。私は昨年この鳥の姿を見たくて外に出てみたのですが、姿もみえないし羽ばたきの様なものも聞えずとうとう何も見る事は出来ませんでした、がこの鳥はこれから先もずっと島民の中に生きつづける事でしょう。

沖 小 島 採 集 記

10R 井 田 範 男

10R 芝 原 幸 夫

・S. 37.9.22 快晴

・出発 ボサド棧橋 → 湯之 → 沖小島

・Member :

宮地先生

八並幸夫 寺脇康文 芝原幸夫 平 繁人 井田範男 肥口一男 黒木陸哉

菊谷幸枝 柿元紀世子 石垣一枝

・私達、動物班の10名は薩英戦争で有名な沖小島に海浜採集に行きました。22日8時すぎボサド棧橋を東松島航路の定期船で出発し、途中致ヶ所港にはいつてから9時20分に湯之に着いた。湯之からは前から依頼していた小船で約2Km沖の目的地に向かった。その船は13人乗ると満員だった。

9時30分頃砂地のA地点に着いた。そこから男子は周囲2Kmのこの島をまわつたがB地点の所で行けなくなつた。ここは岩が多く波が静かだった。岩の上から見ると透明なツリガネクラゲが群をなして、その辺にいた。一匹つかまえようと思つてすくいあげてみたが容易にとれない。

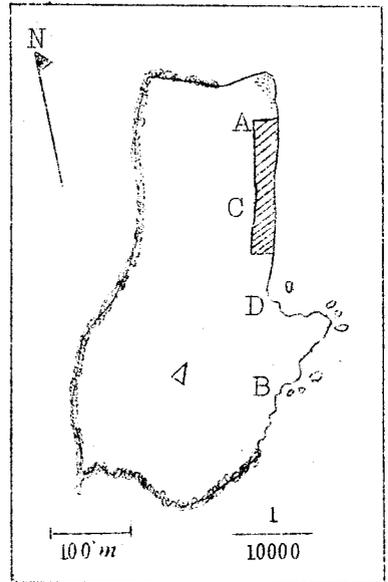
その後B地点から引き返して、上陸地点で海水浴をした。水中めがねでのぞいて見たが、

水底は岩礁と砂だけで収穫なし。又、プランクトンネットを引いて見たがこれも中途半ばでやめた。この島には水が出ないので、海からあがつてタオルでふいても皮ふは塩で白くなっていた。

ここで昼食をとり自己紹介をおこなった。潮が引いて来たので少し大きい石がところがついてるC地点で採集を始めた。波は大変静かで、底は平らな岩礁でタイドプールはほとんどなく、収穫はおもしろくなかった。特に大きい岩のD地点では海底を水中めがねでのぞくと、深さ3mの所にハナヤサイサンゴ・ハマサンゴがきれいに見えた。私はこんな経験は初めてである。その横の岩には肛門の所が赤むらさき色のガンガゼがたくさんくっついていて、その異様な赤むらさき色にみな詠嘆の言葉をはつした。棘にさわつただけで激痛を覚え、赤紫色の傷がついた人も居た。採集物はほとんどなく、3時30分に鹿児島の小船が来たので湯之まで帰った。湯之から定期船で鹿児島に4時30分に着いた。

採集品リスト

- 棘皮動物 1.海胆綱
 ガンガゼ *Diadema setosum*
 管菌目
 ガンガゼ科
 ナガウニ *Echinometra mathaei*
 拱菌目
 ナガウニ科
 2.海鼠綱
 ニセクロナマコ *Holothuria leucospilota*
 楯手目 クロナマコ科
 トラフナマコ *Holothuria pervicax*
 楯手目 クロナマコ科
 ムラサキクルマナマコ *Polycheira rufescens*
 無足目 イモナマコ科



沖小島地図

- 腔腸動物門 1.花虫綱
 ハナヤサイサンゴ *Pocillopora damicornis*
 石珊瑚目 キクメイシ科
 ハマサンゴ *Porites Sp.*
 石珊瑚目 ハマサンゴ科
 2.ひどろ水母綱
 ツリガネクラゲ *Aglantha digitale*
 硬水目 ツツミクラゲ科

節足動物	1.甲殻綱
ケブカオウギガニ	<i>Pilumnus vespertilio</i>
十脚目	オウギガニ科
	2.蔓脚亜綱
カメノテ	<i>Mitella mitella</i>
完脚目	ケハダエボシ科
軟体動物	1.腹足綱
カラマツガイ	<i>Siphonaria japonica</i>
基眼目	フタマイマイ科

一年をふりかえつて

顧問 宮地伸夫

「あこり」が芽生えてからもう一年がたつてしまいました。今年は新入部員が驚く程沢山集つて初めから大変賑やかな活動が展開されました。一年生が今年程沢山入部した事もさることながら、入試を目前に控えた三年生諸君が多数入部して、しかも、その大部分が最後まで活動を続けて呉れたこと、ひよつとすると鶴丸高の歴史に今まで見られないことではなかつたでしょうか。

私は、今年は本校の第二年目。もう少し積極的に諸君の役に立ちたい積りでいたのですが、その「積り」が文字通り「積り」のまま終ろうとしています。

しかし私は、好人物揃いで底抜けに明い性格の三年生、ウサギの様に温和しいが真面目な一年生、そして教は五指にも足りない小人数でありながらよくその中堅としての責務を果たした二年生の、すべての人々の総力で、進学予備校（実に響きの悪い呼び方だが）と陰口をきかれる本校において、誇らしい成果を上げて呉れたと私は確信しています。私がここに云う「成果」とは只単に生物学的な事に関するものばかりではありません。否それ以外に私は誇らしい「成果」があつたと考えているのであります。それを、今年行事の中でも私の頭に特に強く印象に残っている佐多岬採集旅行の時のことを例にとつて説明してみましよう。諸君はあの採集旅行では、台風による悪天候と、潮時の最悪の条件の為予期を下廻る採集量になつた事を残念に思つているかも知れません。しかし、諸君は目に見えない大きな収穫をして歸つたのです。それは諸君自らが、あの直後に生物室で行つた反省会の時に発表したではありませんか。その時諸君が発表した収穫の品目を整理して見ると次のようなものになると思います。1.協同の精神、2.博愛の精神、3.友愛の精神、4.愛校心、5.不撓不屈の精神、6.責任感、7.他人の心からの親切に感謝する心、等となると思います。實際行動は三日間でしたが、諸君はこの間に以上のような収穫をしていたので。疲れた体を炊事当番という責任感で支え、それをまた友愛・協同の精神で手伝う。何と

美しい姿ではないでしょうか。何もしなかつた私は今この文を書きながらも恥しい位です。終始親身になつて協力して下さつたバスの運転手さんが、時計をなくされた事を知つた諸君は競つて乏しい小遣いの中から拠金をし合いました。また、ずつと後日に聞いた事ですが、最後の日の早朝朝食もとらずに鶴泊に行つた水産班の謝君が採集不能という悲しむ可き状態になつて失意の中に帰路についたその途中、悪路をトボトボと歩いてた見も知らないおばさんをバスに同乗させおまけにおばさんも知つてゐる歌をと、「ここはおくにを何百里……」と一緒に歌つたとか。私はその時諸君とは別れて、植物班に同行した為、後まで知らなかつたわけだが、私はこんなに小さな親切が、こんなに大きな喜びとして感じられたことはなかつたのです。人は予期しなかつた事件にぶつかつた時にとする行動がその人の真の姿を現すものだと云います。諸君のとつた行動は本当に素晴らしいものでした。しかしこの行動もあの採集旅行以前であれば、ひよつとしたら起らなかつたものかも知れませんね。あの充実した生活、宿舍のおばさんの心からの持て成し、運転手・車掌さんの絶大を協力に感謝する気持等の総決算として現れた行動ではないでしょうか。この時の収獲はあの苦しい条件のもとで採集された標本の数々と共に、この目に見えない収獲までが文化祭の時に皆に展示されました。文化祭の評判も非常によいものでした。しかし、この想出の多い生物室とも今年限りでお別れです。特に三年生諸君には本当にさびしいことだと思います。しかし外身は變つても、この異色ある鶴丸高校の生物部・園芸部は一丸となつて今までの伝統にそつてますます発展し、自然を愛すると同時に、人を愛する者の集りとしてのクラブとして成長させていきたいと思つたので、卒業された後も機会ある事に新校舎の方に立ち寄つて下さい。

今年大きく生長した「あこり」がますます勢いよく生長し続けることを祈りつつ。

==== 部 活 動 報 告 ====

昭和 3 8 年 度

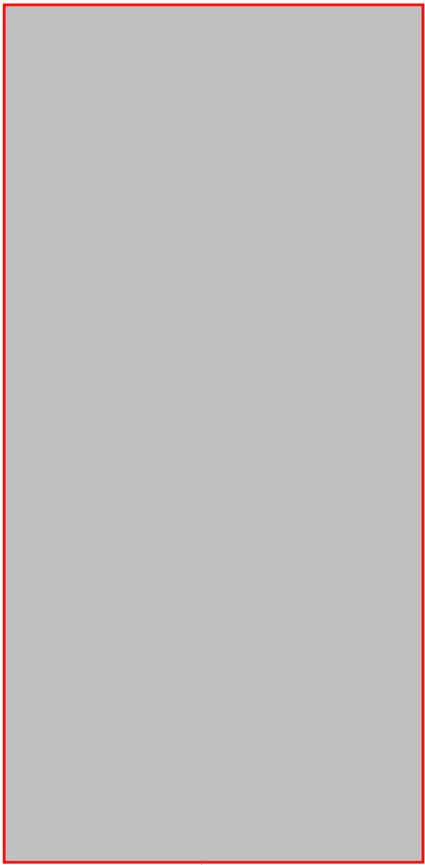
- 4 月 ○ 新入生、部員募集
- かえる、ねずみの解剖
- 七つヶ島海産動物の観察、採集
- 新入部員歓迎会兼ねて、慈眼寺へ採集
- 5 月 ○ 動物、昆虫班、冷水水源地へ採集に
- 城山へ植物採集、 ○ 柳の再生実験
- 6 月 ○ 食用ガエルの解剖、 ○ 佐多採集旅行準備開始
- 7 月 ○ 佐多採集旅行準備
- 8 月 ○ 佐多採集旅行、 ○ その反省会

- 9月 ○海産動物採集, 沖小島へ, ○植物採集, 冷水水源地へ
- プランクトン採集, 市内磯海岸と鵜池海岸へ
- 10月 ○うさぎの解剖
- 植物採集, 烏帽子岳へ
- 11月 ○海産動物採集, 磯海岸へ
- 海産動物採集, 七つヶ島へ
- 海産動物採集, 串木野海岸へ
- てわたりの解剖, ○部誌原稿募集
- 12月 ○「あこう」第2号発行予定

===== 鶴丸高校生物部員名簿 =====

1963年11月現在

顧問	宮地 伸 夫
〃	税 所 篤 知
ROOM	氏 名
10	柴 原 幸 夫
〃	遠 竹 俊 郎
〃	井 田 範 男
11	肥 口 一 雄
〃	石 垣 一 枝
12	定 信 彦
〃	平 繁 人
〃	寺 脇 庚 文
15	菊 谷 幸 枝
〃	柿 元 紀 世 子
16	西 村 英 一
〃	浜 田 美 由 紀
〃	中 馬 邦 子
〃	池 田 幸 治
〃	黒 木 睦 哉
〃	田 中 博 康
17	後 藤 智 子



18	栢	寿	一
◇	德	田	民子
◇	野	呂	多美子
19	玉	利	和彦
24	前	田	宗浩
25	中	内	孝雄
26	八	並	幸夫
28	宮	脇	憲歳
33	津	之	地浪
◇	北	山	武宣
◇	萩	原	淳一郎
◇	森	山	暘
◇	林	田	重邦
◇	太	夫	和人
◇	前	迫	美智子
◇	吉	嶺	楓
◇	有	馬	秀一
35	大	園	正一行
◇	永	山	光義
37	宇	和	誠一
◇	宮	田	克子
◇	有	村	道宏
◇	阿	久	根格
38	野	添	千代子
◇	向		静代
39	肥	後	晶子
◇	鐘	ヶ	江征子
◇	吉	園	清子
◇	窪	田	久子
◇	岩	井	すみゑ

編集後記

研究誌一つを発行するのが、どんなに大変な事が、骨身に徹してわかりました。何もわからない私に暖かい御援助の手をさしのべて下さった先輩の田中章さんおよび池田肇憲さん、三年生の方々の御協力があつたからこそ本日ここに「あこり」第2号を手にする事が出来ました。特に田中章さんと兄さんである鹿児島昆虫同好会の田中洋さんには創刊号から御世話になつたそうです。深い感謝の念に絶えません。

原稿募集を開始して早、1ヶ月、原稿のメ切がのびのびになつたり、期末テストの関係で発行が少々遅れたのは残念です。

今年度は部員がふえた為、原稿が多くなりましたが、長期研究がなく、内容が貧弱なのは少しさびしい気がします。

未熟ながら「あこり」第2号を手にし、創刊号の時の感激を新たに、「あこり」の進歩発展を部員一同心に誓いました。

編集者

八並幸夫

あこり

第2号

鹿児島県立鶴丸高等学校生物部部誌

発行日：1963年12月24日

編集者：八並幸夫

印刷：鹿児島市和泉屋町11の2

アルプス印刷有限公司 電話(2)-7385

鹿児島市加治屋町鶴丸高等学校生物部